

第三編

アイヌ時代

第一章 和人の蝦夷地進出とアイヌ

第一節 胆振鉏いぶりさえの記録

本市に人類が生存し、各地に生活が営まれたことは、すでに前編各章において述べたとおりであるが、どのような人類が、いつごろから住みついたかについては、必ずしも明らかではない。

しかし近世になってから、この地に進出してきた和人によつて記録された地名を見ると、ほとんど、アイヌ語によつて解明できる事実から、これらの地名をつけた人たちは、アイヌの祖先であつたにちがいない。したがつて和人が進出する以前に、すでにアイヌの人たちによる世界があつたことは疑いの余地がない。

そもそも日本史の上で、日本北地の民族がはじめて文献の上に現れてくるのは、七世紀の時代である。養老四年（七二〇）に成つた『日本書紀』¹の齊明天皇四年（六五八）の条によれば

「夏四月、阿部臣、船師一百八十艘を率ゐて蝦夷を伐つ。鰐田、淳代の二郡の蝦夷、望怖ぢて降はむと乞ふ。是に軍を勅へて、船を鰐田浦に陳ぬ。鰐田の蝦夷恩荷進みて誓ひて曰く、官軍の爲の故に弓矢を持たず、但し奴等、性肉を食ふが故に持り。若し官軍の爲めに弓矢を儲けたらば、鰐田浦の神知りなむ。清き白かなる心を持ちて、朝に仕官らむ。仍りて恩荷に授くるに小乙上を以てす。淳代、津軽二郡の郡領を定め、遂に有間浜に渡島の蝦夷等を召し聚めて、大に饗て歸す。」

と記され、また同五年（六五九）には

「是の月阿倍臣を遣して、船師一百八十艘を率ゐて、蝦夷国を討たしむ。阿倍臣、飽田、淳代二郡の蝦夷二百四十一人、其の虜卅一人、津輕郡の蝦夷一百十二人、其の虜四人、胆振鉏の蝦夷廿人を一所に簡ひ集めて、大に饗へ祿を賜ふ。即ち船一隻と、五色の綵帛とを以て、彼の地の神を祭る。肉人籠に至る時に、問答の蝦夷胆鹿島、宍穗名の二人進みて曰く、後方羊蹄を以て政所と為す可し。胆鹿島等が語に随ひて、遂に郡領を置きて歸る。道奥と越との国司に位各二階、郡領と主政とに各一階を授く。」

（『日本書紀』）

と記された。これがいわゆる阿部臣、あるいは阿部比羅夫による蝦夷遠征といわれる記録である。この中で蝦夷国の蝦夷、蝦蟇と記されたのは、「えみし」「えびす」と訓じているから、当時この地には「えみし」とか「えびす」と呼称される人たちが住んでいた。この呼称は『古事記』などの旧記にも見られ、愛瀨詩、江美須、江比須、毛人などと記されており、これを「えみし」と訓ずるのが最も古く、かつ普通であつた。この呼称が「えぞ」と訓ずるようになるのは、平安時代後期になってからのことで、少なくとも『六国史』（日本古代の六種の正史。日本書記（一）六九七）続日本紀（六九七～七九一）、日本後紀（七九二～八三三）、続日本後紀（八三三～八五〇）日本文徳天皇実録（八五〇～八五八）、日本代実録（八五八～八八七）の範囲では、蝦夷を「えぞ」と呼んだ例は皆無といわれる。

では「えみし」と呼ばれた人たちとはどんな人種であろうか。『日本書紀』斉明天皇五年七月の条によると、道奥の蝦夷男女二人を伴った遣唐使を派遣するが、その記事に

「天子問ひて曰く、此等の蝦夷の国は何れの方に有りや。使人謹みて答ふ。国は東北に在り。天子問ひて曰く、蝦夷は幾種ぞ。使用謹みて答ふ。類三種有り、遠きは都加留と名づけ、次は鹿蝦夷、近きは熟蝦夷と名づく。今此は熟蝦夷なり。歳毎に本国の朝に入り

貢る。天子問ひて曰く、其の国に五穀有りや。使人謹みて答ふ。無し、肉を食ひて存活ふ。天子問ひて曰く、国に屋舎有りや。使人謹みて答ふ。無し、深山の中にして、樹の本に止住む。天子重ねて曰く、朕れ蝦夷の身面の異なるを見るに、極理て喜怪し。使人遠く来りて辛苦らむ。退きて館裏に在り、後に更た相見えむ……。」

（『日本書紀』）

と記しており、この記述に見る限りでは「えみし」はアイヌに近いといえる。だからといって古代史に出てくる「えみし」がすべてアイヌと言い切ることはできであろうか。このことについて田名網宏が「古くは東海、東山両道や越の地方の住民で、朝廷の支配圏外の辺民をさし、やがてこの地方が支配圏内に入ると、それより以北の奥羽地方の蛮民がエミシの名でよばれた。」⁽³⁾としたように特定の人種や民族を対象とした呼称ではなく、「まつろわぬ者ども」を指したもので、この中には人種的には日本人であつた人びとと、異人種としてのアイヌの両方が包含されていたらしい。

では『日本書紀』斉明紀の阿部臣の遠征は、どこまで及んだのであろうか。まず同書に記す鮑田は秋田、淳代は能代、津軽は現在の津軽にそれぞれ比定し得るから、この三つの地名から見れば、本州の北端すなわち東北地方まで到達したことはまちがいない。しかし渡島わたる島をはじめ胆振、肉入籠、問竈、後方羊蹄などの地は、どこを指したのであろうか。このことについても各種の説があり、現在のところ定説はみられない。ちなみに河野広道は『苫小牧地方古代史』⁽⁴⁾の中で、つぎのように記している。

「……考古学的資料に関する限りでは阿部臣の北海道遠征と関係があると認められる遺跡は札幌低地帯西側丘陵にのみ限定されて発見され、書紀の地名はそれぞれ、次のように推定されます。

問竈（トピウ）——竹浦に同名の地名が現存（但し書紀のトピウと同一なりや否や不明）

胆振鉏（イプリサベ）―勇払又は江別

肉入籠（シシリコ）―シシリコツでシコツ即ち千歳附近

後方羊蹄（シリベシ）―シリパウシとすれば江別・苫小牧間の何れかと考えられる

大河―石狩川・江別川・勇払川のうちの一つ

幣賂弁島（ヘロベの島）―ポロシリモシリ即ち札幌低地帯以東の地区の別名か

要するに考古学的資料の点からも地名の点からも、阿部臣の遠征地点と推定される地域は、千歳を中心とする江別から苫小牧の間及びその附近に密集しているのでありまして、従来の資料を基礎に推論すればこの地域以外にそれらしい場所を求めることはできません。」

と述べ、阿部臣の遠征は北海道の石狩低地帯まで及んだと推定している。しかしこの中でいう考古学的資料である北海道式古墳はおよそ九世紀の初めごろの所産といわれており、^⑤同氏も論じているように阿部臣の郡役所時代の遺跡そのものではないことは明らかであるから、考古学の成果と一致しない。

また、地名の点について考察してみると、同氏は胆振鉏の胆振をイプツあるいはイパルとし、鉏はサベでサハ Sami の転訛であろうとして、これを勇払または江別に擬し、肉入籠をシ・シリ・コツ「大なる・陸地の・凹み」とし、これが支笏（千歳）の旧名であったなどと主張しているが、勇払の語原はあくまでイプツあるいはイプチに由来するものであり、支笏はシ・コツというアイヌ語であつて、どのような理由でイプリサベのサベや、シシリコツのシリが脱落してイプツやシコツに転訛したのかを説明することができない。胆振鉏についてはすでに新井白石が『蝦夷志』（享保五年）に「イプツ蓋国史所謂胆振鉏即此」と記し、松浦武四郎も明治二年『国名および郡名に関する意見書』の中で、胆振国の由来を日本書紀の胆振鉏に求め、胆振鉏をユウフツ（勇払）としているが、いずれも確かな根拠の

あるわけではなかった。このように日本書紀に記された古地名を、単に類似しているという理由だけでアイヌ語地名に当てはめようとすること自体に無理があり、さらに日本書紀の古地名がすべてアイヌ語であるかどうかとも吟味する必要がある。したがって阿部臣の遠征は東北地方に及んだのは事実としても、これが北海道にまで及んだかどうかは、いまだに疑問の余地を残している。

いずれにしても大和朝廷が東北経略に本格的に着手したのは、七世紀に入ってからのことであるが、七世紀の中葉大化改新のころは太平洋岸では阿武隈川、日本海岸では越後国まで日本人勢力が北上した。その後急速に日本人勢力は北進を続け、神亀元年（七二四）には陸奥の多賀城を設置し、天平五年（七三三）には前進基地を出羽柵から雄物川下流の秋田城に移した。平安時代に入ってから大和朝廷は、大規模な蝦夷征討を実行し、現地の蝦夷集団の激しい抵抗を受けながらも延暦二十年（八〇二）陸奥に胆沢城を築き、北上川中流平野（岩手県）まで進出した。時の征夷大將軍は坂上田村麻呂であった。

このような大和朝廷の北進のころ、北海道では擦文文化が形成され、前述のように石狩低地帯に日本人の前進基地を思わせるような北海道式古墳さえ築造される。この古墳からは奈良、平安朝期の形式である蔵手刀や和銅開珎が見されているが、蔵手刀の分布は奥羽地方を中心としているものであり、当時大和朝に対立していた蝦夷文化圏において、盛んに用いられたといわれている。⁷⁾したがって、奈良・平安朝期には、すでに奥羽地方と蝦夷地（北海道）との間には相当広範な交易Ⅱ文化交流も行われていたと見てよいであろう。そうすれば河野広道が説くように、石狩低地帯の北海道式古墳の存在が、奥羽の豪族阿部一族の駐留地の遺跡と考えられないこともないであろう。

注 ①）黒板勝美編 『日本書紀』昭和十九年 岩波文庫

②）杉山莊平 『エミシとエゾについてのノート』昭和四十六年 吉祥寺女子高校研究誌 5

- (3) 田名綱宏 『古代蝦夷とアイヌ』「蝦夷」 昭和三十一年
- (4) 河野広道 『苫小牧地方古代史』昭和二十九年 苫小牧市教育委員会
- (5) 石附喜三男 『北海道の原始文化』「新版考古学講座五」昭和四十五年、桜井清彦 『アイヌ秘史』昭和四十二年
- (6) 扇谷昌康 『苫小牧市のアイヌ語地名』昭和四十六年「郷土の研究第三号別冊」苫小牧郷土文化研究会
- (7) 河野広道 『北海道出土の蔵手刀に関する問題』昭和三十九年「史流」

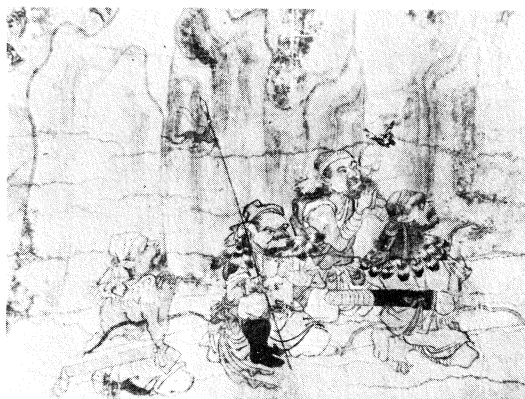
第二節 アイヌ社会の成立

平安時代の末ごろから鎌倉時代にかけて、北海道の文化は大きな転換期を迎えるにいたる。すなわち本州では古代律令制の国家が崩壊して新しく封建制へ移行し、東北地方が全く日本文化圏に入って本州全体が日本文化に統一されてしまう。したがって北海道は、このころからはじめて日本文化との直接交渉をもつことになった。

物質文化のうえから見ると、しだいに大量化した鉄器、陶磁器、漆器などの移入によって、今まで使用されてきた石器、土器類は使われなくなつて姿を消してしまふ。すなわち擦文式土器文化の終末であつた。この終末は地域によって若干の差異があると考えられるが、ほぼ鎌倉時代の初めを前後するころであらう。

このように和人ととの接触が次第にはげしくなると、北方の知識も明らかにになり、この地方に住む人たちを「えぞ」と称するようになった。「えぞ」の呼称がはじめて現れるのは『久安六年御百首』にみえる尾張守藤原親隆朝臣の「えぞが住む、つがろの野べの萩盛こや錦木の立てるなる覧」と詠まれた「えぞ」といわれている。¹⁾

久安六年（一一五〇）は平安時代の末期であり、このころ以降から「えぞ」とその風俗が好んで歌材にとりあげら



聖徳太子絵伝のアイヌ（鎌倉時代）

〔茨城県那珂町上宮寺蔵〕

れた。延慶三年（一一三一〇）に完成したといわれる『夫木和歌抄』もその一つである。この蝦夷（えぞ）と呼ばれた人たちこそ、後にアイヌと呼ばれた人種であつて、この呼びかたは江戸末期にいたるまで存続したのである。

このころの蝦夷に関する資料は、今のところ極めて乏しいが、鎌倉時代末期の元享三年（一一三三）作の『聖徳太子絵伝』には、当時の蝦夷と思われる人たちが描かれており、その容貌や衣服、携帯品の上から見ても、アイヌであらうといわれている。

つぎに室町時代のはじめになると、やや詳しい蝦夷に関する記録が現れるようになる。延文六年（一一五六）に成ったといわれる『諏訪大明神絵詞』の中に

「蝦夷が千島といへるは我國の東北に当て大海の中央にあり日の本唐子渡党此三類各三百三十三の島に群居せり。今二島は渡党に混す。其内に宇曾利鶴子州と万堂宇満伊犬と云小島ともあり此種類は多（く）奥州津軽外の浜に往来交易す、夷一把と云は六千人なり相聚る時は百千把に及べり日の本唐子の二類は其他外国に連て形体夜叉のごとく変化無窮なり人倫禽獸魚肉を食として五穀の農耕を知らず九訳を重ぬとも語話を通じ（難し？）渡党和国の人に相類せり但鬚多（く）して遍身に毛生せり言語俚野なりと云とも大半は相通す此中に公超霧をなす術を伝へ公遠隱形の道を得たる類しあり戦場に臨時は丈夫は甲冑弓矢を帶して前陣に進み婦人は後座に随て木を削て幣帛のごとくして天に向て誦呪の体なり男女共に山經經過すといふとも乗馬を用ひすその身の軽きこと飛馬走獸におなし彼等が

申す所の箭は魚骨を鏝として毒薬をぬり纒に皮膚に触れて其人斃(め)すと云事なし……。」と記されていて、蝦夷はアイヌであることを如実に物語っている。また文中の日の本、唐子、渡党の三類は、『日本書紀』に記された鹿蝦夷、熟蝦夷、津軽蝦夷の三類に対応しているが、これらの位置づけはともかくとして渡党は和人に似ていて、言葉もどうやら通じるということから、早くから和人と接触し同化混血した連中であらうし、一方他の二者は言葉も通じなければ容貌も大いに異なるというから、彼らは本来のアイヌであると判断されよう。⁽³⁾さらに文中に出てくる地名の宇曾利鶴子州は、ウソリケシ州で函館の古名、万堂宇満伊犬はマトウマイでのちの松前であり、津軽外の浜は岩木川河口付近十三湖周辺を指したものと思われる。このように日の本、唐子、渡党といわれた蝦夷は、直接的に日本人とも接触し日本列島の東北部に居住していたことは明らかである。彼らはすでに擦文文化の荷担者であることを捨てて、鉄器と漆器などを周辺諸民族より受け入れ、独自の文化いわゆるアイヌ文化を持った人間集団を形成していたと推定される。その時期はおよそ一四世紀ごろ、鎌倉時代の後半ごろといわれている。これらの人間集団は、少なくとも近世においては北海道を中心にして樺太、千島、カムチャツカ南部および本州の下北、津軽半島に広く居住していたのである。

ではこの蝦夷といわれたアイヌ民族はどのようにして形成されたのであろうか。これについても諸説があつて確定しないが、知里真志保はつぎのように述べている。



アイヌ風俗画(天明5年・三国通覧図説)

「アイヌ民族は北方から渡来した民族であり、その渡来の経路は恐らくカムチャッカ方面から千島列島を南下して北海道へ渡り、その一派は太平洋沿岸を南下して釧路、十勝の浜伝いにエリモの崎を越えて日高のシズナイの辺まで進み、また他の一派はオホーツク海に沿って北上し、宗谷から一つの分派を樺太に送り、他の一派は日本海沿岸を南下して、ユーラップ、オシヤマンベの辺で二つに分かれ、一つの分派は函館の方へ行つて津軽海峡を渡り、東北地方を占拠し、また他の分派はオシヤマンベから噴火湾に沿うて南下し、室蘭から幌別、白老を通つて太平洋岸を東進し、日高のシズナイの辺までいって、あそこで十勝の方から西進してきた一派と衝突し、そこからサル川沿いに奥地にはいったのが今の日高のサル地方のアイヌで、このように一応北海道の各地の海岸に定着したアイヌが、そこから石狩川とか十勝川とか沙流川とか、大きな川をさかのぼつて次第に北海道の内陸に占居するようになったのが、現在われわれが見るアイヌの分布状態であるということを、主として言語研究の立場から私は説いてみたのであります……」

とし、さらに

「とにかく彼等は悠久な昔、遠い北の国からはるばる海を渡つて今居る島々へやってきた。もちろん一度にやってきたのではなく、何回も小群に分かれて次から次とやって来たのであります。そして今居る島々の海辺の川口に住みついた。そして徐々に川をのぼつて奥地へ進出して行つたと考えられる。」

と説いている。この説はアイヌの渡来経路や移動について、極めて興味深いものがあるが、残念ながら仮説の域を出ていない。

アイヌが一つの民族として、彼等の同族意識の高揚を示したものに口承文学がある。このなかでユーカラ（英雄詞曲）の作られた年代について、知里真志保は

「ユーカラというのは、北海道を本拠とするヤウンクル（「内陸人」「本州人」「北海道本島人」と、大陸の方から海を越えてやって来て、北海道の日本海岸の中部からオホーツク海岸の各地に橋頭堡を確保して住んでいたレブンクル（渡来の異民族）との民族的な戦

アイヌの

物語文学

韻文物語（詞 曲）

神のユーカラ（神謡）

カムイユカル……………（一）
オイナ……………（二）

人間のユーカラ（英雄詞曲）……………（三）

散文物語（酋長談）……………（四）

争の物語で、その戦争の舞台は現在いわゆる北方方言地帯と称する北海道の中部、北部、東部を中心に、千島、樺太、利尻、礼文、それから北アジア大陸をも含んだ広汎な地域なのであります。しかも、オホーツク文化が本道沿岸に栄えたのは、今から凡そ千三百年から八百年ぐらい前までの約五百年間と見られておりますので、ユーカラの内容も、大体その頃に現実に行われた民族的な葛藤を歌ったものだったことが分るのであります。そして大陸の方から押しかけて来た渡来の異民族と戦うために、北海道根生いの民族は、各地の酋長を集めて族長会議をやっております。この頃はもう部落部落が孤立していたのではなく、異民族の侵入に対して、本島の連中は一致団結して部落連合というようなものを作り、総指揮者を押し立てて戦っているのであります。そしてそのような共通の敵に対する団結を通して、同族意識を高揚し、自覚し、そこに後世のアイヌという一つの民族を形成する地盤が作られて行くのであります。その民族の存立興亡を賭して戦った歴史的な大事件を、後に回顧して民族的な大叙事詩として歌い上げ、代々伝えて磨き上げて来たものが、他ならぬこのユーカラであつたのであります。上に述べた通り、ユーカラの内容をなす民族的な葛藤の終息した年代は、今から八百年ぐらい前だったと考えられますので、ユーカラが文学として成立するのは、それから後の、民族の苦難を克服して意気軒昂たる平和建設の時代に於てであつたと考えられます。⁽⁴⁾

（知里真志保『ユーカラの人々とその生活』昭和二十九年、歴史家第三号）

と記し、その成立を今から八百年前としているから、ほぼ鎌倉時代ごろと見てよいであろう。しかしその起源をアイヌとオホーツク人との闘争を意味するものとして、西暦八世紀ごろに求めているけれども、これについては異論のあるところで、問題は今後に残されている。

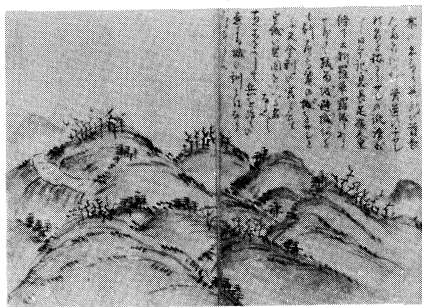
このようにして成立したアイヌの社会とは、どのような姿であろうか。年代はや、新しくなるが、元和四年（一六一八）、キリスト教の布教のかたわら蝦夷地の事情を調査した耶穌会の神父シロラモ・デ・アンジェリスの『蝦夷国報告書』に、つぎのような記事がある。

「蝦夷には將軍のようなその国全体を治めかつ万民が服従する総統治者もないし、また日本の国にあるような、その国を分割して所有している特種な大名といったものもない。もし蝦夷が韃靼に合併されていたり、あるいはこれに隣接していたとすれば、このような総統治者というものについて、たとえ隷属しないとしても、少なくとも幾分かは知るところがあったであろう。ところが蝦夷では各人が単に自己の家の主人であるか、せいぜい少数人の使用人の主人でしかなく、しかも誰れも他に支配者のいることなどは認めもしないし、また他の国にそうした統治者がいることも知らないのである。それでこれらのことを考えると、蝦夷という国はあらゆる他国から分離されており、これらとは何等の関係をもっていないことが、自分には明らかになった。」

ここに記された蝦夷とはおそらく松前附近を対象としたものであろうが、それでもアイヌには統治とか支配ということと知らないほどであるから、それ以前においては全く統一的国家というものはなかったといえる。このような社会は、おそらくはじめは血縁関係を基礎として組み立てられ、その秩序も祖先に近い者を中心として行われ、防備、祭祀、経済を共同とした原始共產制の社会であった。ユーカラの発展段階で言えば、カムイユーカラ人間が或る特定の動物と親類であると考えた、いわゆるトーテムズムの社会―原始共產制の行われている血族的な小集団の社会と考えられようその基礎的な社会がコタンと称して、たとえば一戸ないし二戸よりない部落でもすべてコタンであった。コタン

の統率者が族長、すなわち酋長で、部落を代表する重要な役割を有していた。

しかしながら定住が久しくなると、外来者が加わったり、二つ以上の血縁団体が混合したりして元来の純粋性が次第に失われ、コタンは血族関係よりも地域的關係が大きくなっていった。これはアイヌの原始社会の崩壊を意味するが、これを促進したのは周辺異民族との交易、とりわけ和人との交易によるものであった。異民族より移入した生産用具はアイヌ社会の生産力を高めることになるが、その余剰生産物や、交易によって得たエムシ(刀)、罌(漆器などの物資は、しだいに酋長の権力によって宝物として私物化され、原始共同体の分解を促進して階級分化を生ぜしめ、支配階級を生むにいたった。現存する大きなチャシコツ(砦跡)の構築期が、近世初頭にさかのぼると思われるが、そのころ、すでに多数の労働力を動員できる支配権力が存在していたことを物語っている。このようにコタンは次第



チャシ (寛政11年・蝦夷島奇観)

に非血縁者を含みはじめ、共同体的性格が崩れて父家長制家族が生活単位となり、貧富の差が大きくなっていった。しかしアイヌ社会の生産力は低く、貧富の差は生じていたとしても、なお社会全体として彼等の生活は共同体的性格を多分に残存させており、生業の中心は依然として漁狩猟を主体としたものであった。したがって彼等の経済的生活は非常に不安定なものから脱却することができず、一たび自然の猛威や飢餓に見舞われると、コタンは壊滅的な打撃を受けることになる。このように人口の増加と飢餓による食料の不足から、部落間の争闘を生み、しばしば戦争も起った。トパツトミ(夜盗)の伝承が各地に残されているのもそのためである。このような自然的、社会的制約が人口増大をおさえ、社会を停滞的にして、ついにアイヌはコタンという社会より、それ以上の社会を作るまでに至らなかった。

註1) 杉山莊平 『エミシとエゾについてのノート』 昭和四十六年 吉祥寺女子高校研究誌⑤

(2) 『新北海道史 第二卷 昭和四十五年 北海道、

佐々木利和 『中古、中世における蝦夷の風俗について』 昭和四十七年 北海道の文化 二五号

(3) 知里真志保 『言語と文化』 昭和二十四年 「北海道先史学十二講」

(4) 知里真志保 『ユウカラの人々とその生活』 昭和二十九年 「歴史家第三号」

第三節 和人との戦い

すでに述べたように、和人による日本文化の波が北海道に波及したのは、かなり古いころであるが、日本人が直接的に北海道とのかかわりをもったのは、ようやく鎌倉時代に入ってからのことであった。鎌倉幕府の日記『吾妻鏡』によると、建保四年（一二二六）強盗や海賊の類五十余人を夷島えぞじまに放ったといい、また文暦二年（一二三五）にも夜討、強盗の輩を夷島に流したと記録されているから、当時北海道は流刑地として適していたものであろうか。

また松前藩によって編さんされた『新羅之記録』によると「抑も往古は此国、上二十日程、下二十日程、松前以東はみづがわ（鵠川）、西はより（依地いぢ）（余市）迄人間住する事、右大将頼朝卿進発して奥州の泰衡を追討し御ご（ひし節、糠部津輕より人多く此国に逃げ渡って居住す。」と記され、また『福山旧事記』にも「文治五年七月十九日、鎌倉將軍右大将頼朝卿奥州泰衡追付し給ふ節、津軽糠部より人多く此国に逃渡る。彼等難刀を船舷に結び付、櫓權にして漕渡る。是当国之艦船車權の根元也。是より東方みづがわ（鵠川）、西之方与伊地いぢ四拾里程之内村里人民居住す。」

〔福山旧事記〕市立函館図書館本による〕

と記録されている。この文献は松前藩による潤色もあつて確實なものではないといわれるが、戦いに敗れた逃亡者が渡来したことは充分考えられる。鵠川や余市に至る地にも和人が往来するようになったというが、実際にこの地に至る海岸に、アイヌと雑居して交易が行われるようになったのは、一五世紀に入ってからといわれている。

すなわち和人が北海道に移住するようになったのは一三世紀（鎌倉時代初期）といわれ、はじめは東北、北陸の漁民や農民が季節的にやって来て、漁業や砂金堀りに従事していた。つぎに商人が挙げられる。彼等の対アイヌ交易は古来秋田や十三湊（青森県）などで盛んに行われていたが、時代が進むにつれて、直接北海道に渡る商人が出てくるようになった。その大部分は北陸、とくに福井県の小浜、敦賀方面の商人で、近江、京都方面と連絡しながら、こんぶ、さけ、にしん、わしの羽、毛皮などが取引され、こんぶは小浜で加工されて畿内の市場に輸出していたほどである。このように蝦夷とも交易が盛んになり、商業が次第に定期化するようになると、北海道で越年したり、その代理人をおく商人も現れ、だんだん定住者がでるようになった。

移住者の第三に挙げられるのは武士である。岩手県北部の南部氏は、鎌倉時代を通じて次第に領主化し、青森県東部から西と北へ勢力をのばしたため、これに圧迫された津軽、下北方面の土豪たちの中には、海を渡って北海道に逃れ、渡島半島に住みついた。津軽十三湊に拠点をおいた安東氏もまたその一人であつた。そのほか北陸方面から渡ってきた武士もあつたらしい。

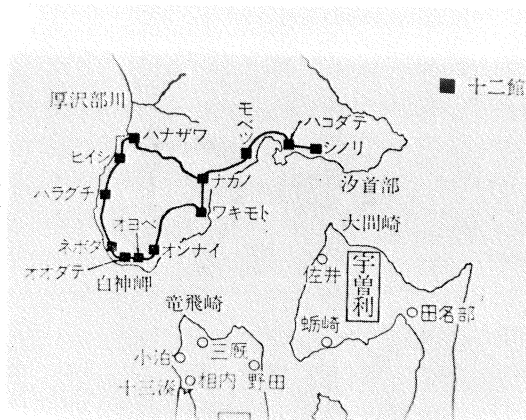
このようにして渡島半島南部に移住した和人は、東はシオクビ岬、西はアツサブ川に至る数十里の海岸にアイヌと雑居して部落をつくつていた。しかし新しく本州から逃亡してきた武士は、しだいに周辺の住民（渡党やアイヌ）を

従え、来航する商人からは関税をとり、または朝貢させ、各地に拠点
を築いて小領主化していった。『新羅之記録』によれば、当時箱館付近
から上ノ国付近にかけて、一二の砦^{とりで}があり、これを館^{たて}とよんだ。一五
世紀半ばのころであった。

このような和人の渡来によってアイヌとの雑居が行われ交易がはげ
しくなると、両者の間に摩擦が生ずるのは当然であった。和人の進出
はアイヌの漁場を犯し、その交易には侮辱、欺瞞^{きぼん}がつきまといつたので
アイヌの内には不満と反感が醸成されてきた。和人との接触により一
部のアイヌ支配階級は権力および蓄財上の便をえたかもしれないが、
アイヌ社会全体としては隷属化、貧困化し、そのため酋長個人の収奪
致富にも限度が生じ、全般的には社会構成の落差から生ずる重圧をひ
しひしと感ぜざるをえなくなってきた。社会不安、個人不満がつもつて、
ちよつとした口論とか流言とかを口火として、大暴発がおこる基盤がつくられていった。⁽²⁾

ついにアイヌと和人との最初の大衝突は、長禄元年（一四五七）五月、東部の酋長コシヤマインが蜂起するに及ん
で大乱となった。この事情を『新羅之記録』は、つぎのように伝えている。

「志濃里^{シノリ}の鍛冶屋村に家数百有り、康正二年（一四五六）春、乙孩^{オウガイ}来て鍛冶に劊^{ウキ}刀を打たしめし処、乙孩と鍛冶と劊刀の善惡価を論
じて、鍛冶劊刀を取り乙孩を突き殺す。之に依て夷狄悉く蜂起して、康正二年夏より大永五年（一二二五）春に遘^{あひ}るまで、東西数十
里程の中に住する所の村々里々を破り、者某^{シヤモ}を殺す事、元は志濃里の鍛冶屋村に起るなり。活き残りし人皆松前と天河とに集住す。」



館の所在地）榎本・君：北海道の歴史）

この記事は松前藩に残るもつとも古い記録で他書には見られず、詳しい具体的なことも明らかにされていないが、事件とともに各地のアイヌはたちまち蜂起し、東は牟川（ムカ 鶴川）、西は与市（ヨイ 余市）に至る間の和人は襲撃され、残った者は松前、上ノ国方面にのがれた。翌長祿二年のコシヤマインの大挙兵によつて志濃利、箱館をはじめ、諸館は相ついで攻落されたが、下国家政の茂別館（上磯）と武田信広の花沢館（上ノ国）はよく耐えぬき、武田信広は選ばれて先鋒となり、翌年コシヤマイン父子や多くのアイヌを殺し、いちおう乱はおさまった。しかしこれで和人の西南北海道覇権が確立したわけではなく、このあと約一世紀にわたるアイヌのいわゆる植民地化に対する抵抗の歴史がはじまった。つぎにこれを列挙してみると

永正九年（一五一一） 箱館、志濃里、与倉前の三館を攻撃、館主ら戦死。

永正十年（一五一二） 松前の大館を攻撃、館主ら戦死。

永正十二年（一五一一五） 東部酋長カノイチ兄弟（道史年表にはシヨヤコウシ）大館を攻撃、光広いつわつて和睦し、酋長ら謀殺される。

大永五年（一五二五） 東西アイヌ蜂起。

享祿元年（一五二八） 小集団のアイヌ、大館を夜襲、三代良広に撃退される。

享祿二年（一五二九） 酋長タナケシ上ノ国和喜之館を攻撃、良広いつわつて和睦し、欺いてタナケシを殺す。

享祿四年（一五三一） 徳山館を攻撃。

天文五年（一五三六） 酋長タリコナ（タナケシの女婿）大館を攻撃、義広いつわつて和睦し、タリコナ夫妻を館中に招き酒を飲ませ謀殺する。

この表でみるように、数的には常に劣勢であつた和人は、アイヌに対して宝物でつりよせた偽りの和睦と酒宴の間

における皆殺しという手段を用いている。これは上古以来東北の蝦夷征討に用いられたのと同じ方法であった。かくして渡島半島の箱館、松前、上ノ国一帯におけるアイヌの蜂起はしだいに尻つぽみとなり、一方、武田氏はこの間に、蠣崎氏の養子となり、さらに安東氏の代官を追って福山に移り、光広、良広らが他の封建小領主に代って北海道南部を統一する領主に成長したのであった。

天文十九年（一五五〇）蠣崎季広は、中央部徳山も安固となったので、武力政策から懷柔政策にうつり、多数の宝器を諸酋長に与えて歓心をかい、瀬田内（瀬棚）のハシタインを西夷の酋長、知内のチコモタインを東夷の酋長とし、翌二十年（一五五一）には商船往来の制を定めて商人から税金をとって、その一部を両酋長に配分することにした。文禄二年（一五九三）、蠣崎慶広は朝鮮遠征のため肥前名護屋にいた豊臣秀吉に謁し、志摩守に任ぜられ、つぎのような制書を受けた。

松前において、諸方より来る船頭商人等、夷人に対し、地下人に同じく、非分の儀申し懸くべからず。
並に船役の事、前々より有り来るが如く之も取るべし。自然此旨相背する族之在らば、急度言上すべく、
速やかに御誅罰を加へられるべき者也

文禄二年正月五日

朱印

蠣崎志摩守とのへ

この制書によって蠣崎氏は収税権を確保し、蝦夷を治める支配者として公認されたが、あくまでもその支配の及ぶ地は、まだ西西北海道に限られたのであって、それ以北の広大な奥地には、まだ隠然としたアイヌの世界があった。

注（１）『新羅之記録』「新北海道史第七卷史料一」昭和四十五年 北海道

（２）奥山亮『北海道史概説』昭和三十三年、奥山亮『郷土の歴史』昭和三十五年

第二章 苫小牧地方のアイヌ

第一節 勇払アイヌ

一五世紀の半ばごろ、渡島半島西南部に和人による初期の封建制が確立されたところ、この地方には蝦夷とよばれる人たち（アイヌ）が住んでいたらしいことは、すでに前章で述べたとおりである。

本地方におけるアイヌ文化についての考古学的調査は、今のところ余り進展していないが、美々川のほとりにはタツプコプ、植村、平田等の遺跡が発見されており、植村遺跡のアイヌ墳墓からは、嘉祐通宝や洪武通宝などの渡来銭が出土しているから、室町時代¹のころ、すでにこの流域にはアイヌのコタン（部落）の形成を見たことは確実である。また千歳川、漁川の流域をはじめとして、鷗川、厚真川の流域などにはアイヌのチャシコツ（砦跡）が分布しているが、チャシの形成年代はおそらく近世初頭に溯ると推定されるから、これらの流域にもアイヌ民族が集落を形成していたことであろう。

この地方のアイヌのコタンが文献に登場するのは、ようやく一七世紀の半ばに至ってからである。すなわち寛文九年（一六六九）の蝦夷乱の記録を残す『津軽一統志』に「いふつ、是迄三里許奥にしこつ在家百軒程」と記されている。いふつは「イブド」で、現在の勇払であり、しこつは千歳の古名であるが、当時千歳を中心とした地域の総名を「しこつ」と称したのであって、ここにアイヌの人家が百軒ほどあったというのである。このように近世の文献

から見ても、千歳川、美々川をはじめとして鷗川、厚真川流域には、おそらく近世以前より、濃密な蝦夷集団が分布していたことが想像される。この集団の一部が後代になってから勇払の河口に半強制的に集められて、漁業労働力となった、いわゆる勇払アイヌの前身であつた。

ではこれらの川筋に分布していた蝦夷集団とは、どのような相互関係を持ち、どんな系統のアイヌであつたのであろうか。彼等は本来、文字を有しないから、自らの歴史を記録するということはなかったが、先祖より代々語り継がれた口伝や習俗を残しており、これらを調査することによつて、或程度の疑問も解決されることも少なくない。

千歳川筋のアイヌの伝承に

「日高幌尻岳の山を支配する神（ヌプリコルカムイ）である熊が、人間の女に懸想して子供を生みました。」

というのがあつて、日高幌尻嶽や鷗川の嘴細鴉に木幣（イタカ）を捧（たも）げてカムイノミ（神祈り）をする人たちによつて伝えられているという。^{（2）}この習俗は、アイヌのパセオンカミといわれるもので、このことによつて千歳のアイヌの故郷が沙流や鷗川にあつて、そこから移り住んできたことを物語っている。また文化年間の記録である『土人由来記』（北海道行政資料課所蔵本による）には、千歳川支流のイサリ（漁）、ムイサリ（茂漁）のアイヌの由来について

「ムイサリ土人の根元は、男土人はホロサン（注）日高幌去の生、女土人は、昔は地名ヒホク（注）日高新冠と申て、当時のニイカツ生にて夫婦に相成、サル（注）沙流に永住致居候得共、サル山々に鹿獺も無之畑作等も格別無之、飯料乏敷難渋に付、夫婦にて段々と相談いたし候には、様子承り候所イサリ、ムイサリと申処、夏より秋迄鱒、鮭、雑魚等沢山の内に候間、其処へ来り永住致し候はば、安心に相成可し申と夫婦一□致し、夫よりムイサリへ相越、同所に住居いたし候。」

とあり、この子孫がシコツ（千歳）土人となつたと伝えている。この記録によれば彼等の故郷は日高の幌去（ホロサ）で、幌尻嶽の神にイナウを捧げる人たちと同じ仲間に属するいわゆるサルンクル（沙流の人びと）の系統であつた。

樺太および北海道のアイヌの系統については、すでに河野広道の墓標による調査研究がなされ、同氏はこれを六大分派に分類し、さらに六大分派に含まれる小分派の名称を各々のアイヌの居住する地方の代表的地名をもって付している。⁽³⁾それを見せればつぎのようになっている。

Ⅲ	Ⅱ				Ⅰ		アイヌの分派	男子墓標	女子墓標
	7	6	5	4	3	2	1		
サルンクル		メナシクル		ペニウンクル	シムムクル	西エンヂウ	東エンヂウ		
		イ ト ア チ ヌ	東南部 メナシクル						
頭部鏤型		Y字股木	Y字股木、稀にT字形	頭部二稜または三稜の槍形	頭部三稜の槍形、稀にT字形、權形	一側に小枝あり、彫刻あり	板碑、中央に近く穴あり、多くは彫刻あり		板碑、中央に近く穴あり、多くは彫刻あり
太き棒状、頭部針頭形		太き棒状、上方に近く縊れあり、頭部短し	T字形	太き棒状、上方に近く縊れあり、頭部長し	T字型	太き棒状、彫刻あり 頭部針頭状			

(河野広道『アイヌの一系統サルンクル』による)

さらに同氏によれば、サルンクルの分布について、つぎのように述べている。

「墓標の型式より見たるサルンクルの分布区域は大体日高の染退川（シブチャリ川）以西、室蘭以東の太平洋岸にそそぐ諸川流域と

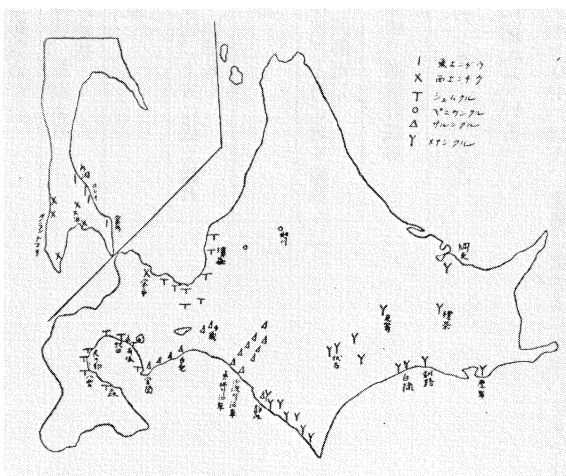
(註、鶴川の誤であらう)
海岸に分布し、沙流川及び勇払川の流域に最も多く集団しており、一部は石狩川下流と太平洋とを結ぶ札幌低地帯を北上して、千歳付近まで伸びている。現在の主なる部落は、静内郡静内、沙流郡幌去、二風谷・平取・波恵、勇払郡辺富内・累標・杵臼・飼熊・稲苗符・深牛・似濱・ニセツプ・カイカウニ・鶴川・チン、白老郡白老、幌別郡幌別・登別・元室蘭、千歳郡千歳・ウサクマイ・蘭越等であるが、一部は東進してメナシクルの中に住み(既に静内ではシムムクルと雑居している)他の一部は西進してシムムクルの中に、特に室蘭より有珠に到る間に見出される。」

〔河野広道「アイヌの一系統サルンクルについて」昭和七年人類学雑誌〕
として、近接の諸分派とは言語、伝説、風俗、習慣において著しく異なっているのだという。したがって苦小牧周辺のアイヌは、すべてサルンクルという一分派に属していることがわかる。

それではサルンクルといわれる分派は、どのようにして成立したのであろうか。千歳のアイヌの口伝に、つぎのようなものがある。

「コロポックルとアイヌの女が結婚して、その間にできた子供が一人足らずで、兄をコキナウといい、妹をカルベチシカリといい、兄は長都の人の先祖になり、妹は由仁に嫁に行つて、由仁の人々の先祖になり、夕張地方を狩場にしていた。」

(『千歳市史』)



アイヌの墓標

(河野：アイヌの一系統サルンクル)

というのである。また鵜川筋のカイクマ（穂別町）の古老の話に「私の一六代前までは千歳にいたコロポックル神で、背丈は二尺五寸だった。」⁴とあり、千歳にも穂別にもコロポックルの子孫だという人びとがいる。このことは十勝地方に多くみられるコロポックル（路の下の人）伝承が、この地方にまで持ちこまれたことを暗示している。さらに同川筋の上流の口伝に、「鵜川の上流の大崩は、昔北見の湧別から他の部落の財宝をかすめて歩く、群盗の群がやって来たところ、赤い布で鉢巻をして子供を背負った女神が踊っていたので、自分達を鼓舞してくれているのだと思って、そこに夜営したところ急に山が崩れてきて、群盗を埋めてしまい、それが蝮になった。」というのがある。野盗はトパットミといい、日高や石狩の各地にある伝承で、多くは北見の湧別、十勝、釧路からやって来るということになっている。鵜川筋のカイクマの古老の話では、群盗は釧路からも来たが、十勝からは群盗でなく先祖たちが来たといいい、安住（穂別町）の古老は十勝や湧別から群盗がやってきたが、釧路の人たちはむしろ好意を持っていたといわれ、必ずしも内容は一致していない。しかしこのような伝承の存在するということは、この地にやって来た人びとには、湧別系統の人たち、十勝や釧路とつながる人たち、あるいはコロポックル系といわれる人たちがあつたということ、北海道の東北部から、いろいろな経路を経てここに移住して来たらしい。

ところが、鵜川筋でも下流の汐見では、かなり内容が異なっている。ここの古老の伝承によれば「その昔、内地で殿様に仕えていた女中が、無礼な行爲をした罪で、箱に詰められ海に流された。流れついたのが日高厚賀の海岸で、陸に上って白い犬に助けられた。犬は女を伴って海岸の洞穴を住家として暮した。犬はやがて若者となり、二人は夫婦となった。二人の間に男の子も二人できた。兄弟は長じては、鹿や熊を獲ったりして暮していたが、或時ふとしたことから兄弟はけんかとなり、それがもとで弟は家を出て鵜川のキリカチコタンに身を寄せた。ところがここでも酒盛りの最中に人を殺して追放され、川尻に移り住んで部落を作った。これがチンコタンの始まりで、一三代昔のこと

である。」

(鵜川町字汐見 新井田勝雄より聞書)

というのである。これに類した伝承は、近世の文献等にも見られるが、寛政一二年(二八〇〇)の『蝦夷島奇観』には、つぎのように記している。

「松前^本マトマ^へ、福山ヨリ東蝦夷地百里バカリニサルモンベツ(注、沙流門別)トテ河アリ。此山奥ニヤイハルト云年老の酋長僕迎行セシコロ道ノ傍ニ出迎テサルモンベツノ峠ニ案内ス。……(中略)……ヤイハル云。古ヘ南方ノ神ノ国ヨリ女神一人虚舟ニ乗シテ此ノ辺ナルシツナイニ漂着シ玉ヒケル。珍宝種々ニ持テ来レリ。黄金白銀水晶玉行器耳盪乱管銚子玉盃金箸杯盤其外ノ宝物数多シトナリ。此島ニ漂流ノ始メ風雨ヲフセグニ室ナク、食物ヲ求ルニ由ナクシテ餓タリケルニ、何レヨリカ一匹ノ白狗来リテ神后ニ近付馴スルニ心アリケニ尾ヲ振リカシツキ先立行ヲ嬉シク伴ヒ行シニ、大ナル巖屈ヲ得テ、茲ニ入テ日月ヲ送レル間ニ彼犬海辺江出テ魚類海藻ナト持来リ、或ハ山野ニ走り菓物草実ヲ運ビ餓ヲ凌ガセ、是ニ露命ヲツナキ、夥數キ光陰ヲ送ラル間ニイツシカ狗ノ子孕、夫ヨリ子孫伝リシトナリ。依テ女夷ハ神名ノ血脉ニシテ男夷ハ白狗ノ胤ト伝ヘ聞ケリ。」

とあつて、その祖先は南方の国より渡来したというもので、サルンクルという分派もまた決して単一の系統ではなく、いくつかの血族集団の複合したものであつたらしい。

このことについて名取武光は、沙流川流域のサルンクルのコタンをエカシ・イトクパ(祖印)などによって系統を調査したが、これによれば次のような家系に分類される。⁽⁵⁾

- ① 古くからの住人であつたシサンクル系の人々
- ② 北見、十勝、釧路などより移住してきたフモシルシ系の人々
- ③ 鵜川上流の穂別に故郷をもつシンタランクル系の人々

④津軽の宇鉄より来たといわれる人々

このうち津軽の宇鉄より来たという人々は、かつて松浦武四郎が幌去でアイヌに聞いた話で現存せず、またシサルンクル系は、この流域の住民としては最も古いが、ほとんど絶滅に近いという。また穂別に故地をもつシタルンクル系は川下のコタンに居住しているが、穂別のシタルンクル系から数えて、一二代、または一七代といい、一代を二五年とすれば四二五年位^{さかのぼ}溯ることになる。またフモシルシ系は中流より上流のコタンに多い家系で、その古さを一六代あるいは一八代というから四五〇年位以前となるが、第六代のニベトランがアペツ（平取町）の城主となったのは、三〇〇年位前といわれるから、各系統の移動の古さもおおよそ想像できよう。

またすでに述べたように千歳アイヌは、サルンクルの仲間であるが、名取武光の調査によれば、シサルンクル系とみられる家系（二一代―約二五〇年前）、沙流アイヌを遠祖とする家系、および鷗川より移住した家系（三代前）とがあるといわれる。⁽⁷⁾しかしながら沙流川筋や千歳川筋に比較して、鷗川や厚真川筋についてのデータは現在のところ不明である。しかし沙流川筋のシタルンクル系が鷗川上流の穂別を故地としたり、ルベシベ（穂別町）に先祖が本州の南部から来たなどという家系があるなど、その系統は沙流川流域同様に単純なものでないように思われる。

以上のようにサルンクルといっても、その家系は必ずしも同一のものではなく血縁や由来を異にし、いくつかの家系の複合した集団であった。

注（1）『目でみる苦小牧の百年』昭和四十八年 苦小牧市史編さん室。嘉祐通宝の鑄造は嘉祐年間（一〇五六―）、洪武通宝の初鑄年は洪武元年（一三六八）で、流通、伝世など考慮すれば室町政権の確立したころ、アイヌ墳墓に副葬されていたと推定している。

（2）『千歳市史』昭和四十六年 千歳市

- (3) 河野広道 『墓標の型式より見たアイヌの諸系統』 昭和六年 「蝦夷往来」
- (4) 『穂別町史』 昭和四十五年 穂別町
- (5) 名取武光 『アイヌ民族の精神生活』 昭和二十三年 異国北海道
- (6) 名取武光 『削箸、祖印、祖系及び主神祈より見たる沙流川筋のアイヌ』 昭和十五年 人類学雑誌
- (7) 名取武光 『千歳アイヌの祖印』 昭和二十四年 「民族学研究」三卷四号

第二節 生活と文化

一 狩 猟

苫小牧市の周辺は、鷗川、厚真川、勇払川、美々川をはじめ、さらに北には千歳川や石狩川などを擁した地理的環境にあつて、かつてはこれらの川筋には数多の部落が割拠し、古くからアイヌの生活舞台となつていた。元来アイヌの生業は狩猟や漁労を主体とし、いわゆる食物採集民として一家をあげて各地を転々と移住することが多かったと思われるが、やがて定着化へのみちを歩んだものであろう。

コタンは主として川筋に沿つて営まれたが、渡辺仁はこれについて五つの生態圏を設定している（『アイヌの能祭の社会的機能並びにその発展に関する生態的要因』民族学研究二九卷三号。すなわち

1 河川水域（サケ、マスの漁労）

2 河岸低地（農耕）

3 河岸段丘面（食用植物の採集と鹿猟）

4 河川兩岸山地（鹿の越冬地）

5
源流山地
(熊獵)

これによれば、アイヌは3に生活の本拠をもち、1と5に仮小屋をそれぞれつくり、男たちによって一時的に山の生活、川の生活が営まれた。狩猟は山野に雪が降る一月から始まり、翌年、雪が消えるまで主として鹿、

熊の獵期となり、漁労は七〜九月ころはマス、一〇〜十二月はサケ漁の季節となっていた。

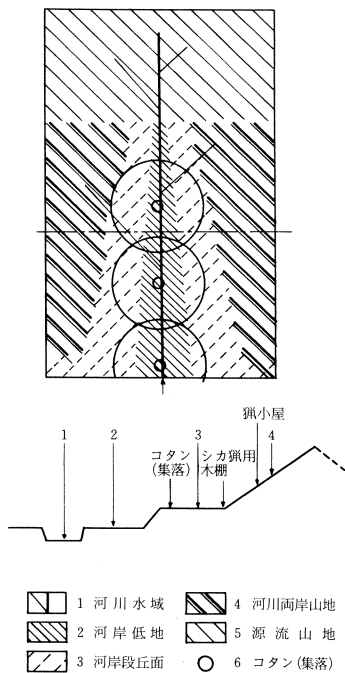
狩獵のなかでも鹿獺は、アイヌの食料資源サケ、マスにつぐ重要な食料の獲得手段であつた。日高地方は冬でも雪が少なく鹿の越冬地であつたから、鹿の移動ルートにあるこの地方は、鹿の猟場として、絶好の地であつた。¹⁾寛政十二年（一八〇〇）の『東蝦夷地日記』に

「はるか向ふに三丁ばかりの間一面に赤く見ゆる故に何ぞと問ふに土人弓矢を握り進行、其音に今一面に赤く草の枯れたと見えし所八方に散乱するしかの群集りしなり。その数万を以て算ふべしと思はれる。土人の言にくまは好んで陰森たる木立に住み、しかは好んで明き所に住むと、これくまを恐るなるべし。」

と記されるほどであつた。したがつて

「鹿は昔、水や空気のようにありあまるほどいたので、あまり重要視されず、多くの野獣が神の化身と考えられているのに、鹿だけは鹿持神の持つ袋の中に入っていて、その神が山の頂に袋を投げおろすのである。」（『千歳市史』）

と伝えられている。





仕掛け弓（寛政11年・蝦夷島奇観）

狩猟の道具には弓（クー）、矢（アイ）、矢筒（イカヨップ）、山刀（タシロ）、小刀（マキリ）、槍（オプ）、仕掛け弓（アマッポ、クアレ）等が用いられた。矢の先端すなわち鏃には、竹、骨、鉄、赤銅が使われた。金属はすべて本州からの移入品である。鏃にはトリカブトという草の根からとった毒（スルク）を塗布して使った。

鹿猟の多くは弓矢によるものが一般的であったが、仕掛け弓による方法や、コタンの共同狩猟として、断崖（だんが）を利用した「鹿落し」による方法も行われた。

熊はアイヌの信仰によれば、キムンカムイ（山の神）と呼ばれ、神の化身と考えられていた。その神々の国は山奥の大山にあるという。だから熊というものは人間の里に遊びに来るとき、一枚の黒い毛皮の外とうを着て、お土産に肉を背負った姿で来ると考えられている。したがって昔の狩猟は毛皮よりも肉が目的であったことは、肥った熊のことをシケカムイ（荷物を負うた神）と言ったから、毛皮の悪い時でも年中獲ったらしい。

熊狩りはふつう一二月ごろから冬期間行われる。これは熊の穴ごもりをしたのを探し、入口に七、八本の棒を立てて、入口をふさぎ、出て来るところをプシ矢で射止めた。熊の穴には所有権があつて、立木に自分の祖印を刻み、他人はこれを犯すと論争（チャランケ）になった。

また仕掛け弓（アマッポ）で熊を獲る時は、五、六〇間離れて立木に印をつける。この時、隣のクチャ（猟小屋）の者に予め断つておくが、過つて人がアマッポに掛つたら、仕掛けた人が罪になる。古老（エカシ）たちが集まって賠償を決め、宝物や刀など財産をつくり没収されてしまうこともあつた（『鶴川町史』）。

このほか狩猟の対象としたものとして、かわうそ（エサマン）は、昔、支笏湖に沢山いたという。丸木舟で湖畔を

まわり、犬を湖岸に歩かせて湖に追い込み、エサマンオブ（かわうそ槍）で突いて捕獲した（『千歳市史』）。

狐は仕掛弓で獲るか、穴の中に入っている場合は、煙でいぶして出て来るのを捕獲した。

でんは通る道が決っているので、その道の途中にアクペという箱形のわなを掛けて獲った。

うさぎを獲るには、ペピタニといって若木を曲げて作った一種のわなを使用した。

鶯は川岸にアンとかホツケチセ（寝小屋）という小屋をつくり、小屋の前の川の中に鮭をとめておき、その近くに止り木をつくり、鶯が鮭を食おうとして止り木に止って川の中の魚に嘴を伸した時に、小屋の中から鶯鉤（コンケプ）を出して脚にひっかけ、小屋の中に引込み首をねじって捕えた（『千歳市史』）。

二 漁 労

元文四年（一七三九年）の『北海随筆』によれば「蝦夷は海辺に住て山に住はすくなし。漁人の故なり。山に住む蝦夷は稗、粟を作り又は獣を取て食し其皮を着す。」と記されているが、古くから食料を漁労によって得ていた。漁労には主に海漁と川漁とある。特に川漁による鮭は鹿とともにアイヌの重要な食料であったことは、鮭をシペ（真・魚）とか、カムイ・チェプ（神・魚）と称したほど重要な魚であった。

鮭漁は秋から初冬にかけて、産卵のために川を溯上して来るのを捕獲するのであるが、味が良く栄養も高いので、冬季間の干し魚として貯蔵するのに好適なものであった。『東蝦夷地各場所様子大概書』によると、ユウフツ場所では「夷人食物は四季共に魚鉤にて取続き来候得共、海漁無数故川漁をして夫食とす。初秋よりは千年川にて鮭漁有、是を重の食にし産物出す也。」と記しているように、千歳川は鮭漁の中心となり、遠くは沙流や新冠のアイヌたちもはる

ばるとやつて来たのである。

川を溯る鮭を捕獲するのに最も一般的な方法は、漁鉤（マレック）で突く漁で、丸木舟で川を上下しながら、泳いでいる鮭を刺しとり、または川の淀みに隠れている鮭を刺しとった。

ウラエ漁という漁法は、川を両岸から木の枝の垣を作つて真中だけを明け、そこに袋網を置いて集まつてきた魚をすくい上げて捕えるというものである。『千歳市史』に

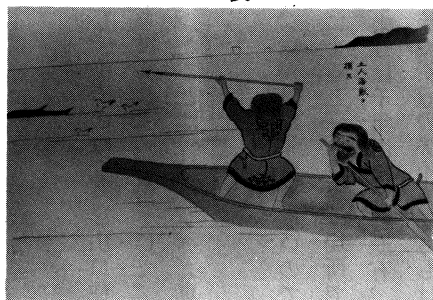
「千歳川で昔行われたウライ漁は日本の築に似たもので、急流を無理して溯つた魚が、流れのよどみで一休みしているうちに、水の流れにおされて川下に仕掛けてある根曲竹で編んだ籠の中に落ち込むというもので、これは普通のウライのように番をする必要がなく、籠に入った魚を集めるだけで、より進歩的な仕かけである。」

と記している。

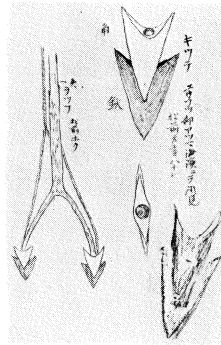
ラオマップというのは、根曲竹や柳の枝を編んで作る笥（コシ）のことで、鱒とかあめます、いわな、うぐいなどを獲つた。いわなやうぐいを獲るには谷地萩とか枯れた蓬の茎などを編んで作り、ウラエのように川を両方からせき止め、その真中の空いた所に仕掛ける。これには上り魚を獲るものへペライパロ・ラオマップ（川下に口を向ける笥）と、川をくだつてくる魚を獲るものへバシパロ・ラオマップ（川上に口を向ける笥）とがある。

このほか引網（ヤーシ）も使われた。これは主に夜にやるもので、二艘の舟で袋網を曳き流れに乗って下りながらのぼつてくる魚をすくうのである。舟でなく二人の人が川をこぎながら曳く場合もあった。

鷓川の川漁にはシシヤモ（柳葉魚）漁がある。シシヤモは鷓川のアイヌの重要な食料となっていた。昔のシシヤモ



アイヌ漁労図（蝦夷風俗図）



海漁の道具
(寛政11年・東游奇勝)

漁は、大群で川を溯上するシシャモを岸から手網ですくい上げたり、ウライ（薬を打ったのち、これを結んだアトサ（筵）にシシャモを追い込んでとり、丸木舟に移す方法であった。シシャモは乾燥してブー（倉）に入れて保存し、一年中の食料とされた。豊漁の時は川を歩く時に足が川底につかず、シシャモを踏みつけ舟のあかとりで汲み込むほどであったという。

海漁は鵠川や厚真のアイヌによって行われていた。しかし川漁に比べて余り盛んではなかったらしい。鵠川チンコタンの古老によれば、鱒や鮭ははえなわを使って釣ったほか、シリカップ、キナンボなどは銚を投げてとったという。また寄鯨もあつた。昔沙流との境に鯨が揚がつた時、互いにチャランケ（談判）となったが、沙流は男神の川で鵠川は女神の川であるから、イメキ（配給）は女の役だということで鵠川の勝となり、両方仲よく分配したという。

三 農耕と植物採集

北海道では擦文時代において、すでに原始的農業の存在が認められており、アイヌも古くから原始的農業を営んでいたと思われるが、文献に現れたのは一八世紀のはじめ、松宮觀山の『蝦夷談筆記』（宝永七年・一七一〇）が最も古い記録である。それによれば、松前付近では「粟、稗少々作り候由。其外の穀物土地に应ぜず候。大豆、小豆、大角豆、瓜、茄子等近年少々宛作り候由。」と記され、また正徳五年（一七一五）の『松前志摩守蝦夷地風俗書上』には「蝦夷にも所により粟を作り申候。西わセタナイ・フトロ・シマコマキ・スツ・オタスツ・イソヤ・フルウ・イワナイ・シヤコタン・ヒクニ・フルヒラ・シクツシ等所々の蝦夷へ少しつ粟作り申候。東わヲシヤマンベ・ノタヘ・ウス・エトモ・シラライと申辺のもの粟作申候。」とあるから、日本海岸ではシクツシ（小樽祝津）、太平洋では白老

あたりまで粟が栽培されていたらしい。しかし寛政の初めになると、ついに襟裳岬を越えて十勝、釧路方面にまで粟稗を作っていることが文献に現れているようになった。しかしこれは、あくまでも和人によつて記録された年代で、アイヌの農耕の起源を意味するものではない。すなわちアイヌの伝承に、祖神オキクルミカムイが、アイヌモシリ（人間世界）に天下るとき、天国から稗の種を盗み、それを両脛を断ち割った中にかくし、アイヌにもたらしたという作物起源説話などもあつて、農耕はアイヌ本来のものではなくて他からの移入文化であり、わけても本州から渡来したものであろう。

文化五年（一八〇八）の『東蝦夷地各場所様子大概書』によれば、山越内より日高沿岸の各場所のアイヌは、当時粟、稗の栽培をしているが、ユウフツ場所については「場所に寄、粟、稗、大豆、小豆少し作れとも、千年川場所は先年タルマイ山焼、石の焼砂にて作物生立難く所多く有、うはゆり、ふくしや等を取、糧にもする也」と記し、また文化三年（一八〇六）の『毛夷東環記』には「此川目（注、鷓川）の夷、粟、稗、煙草杯を造り、酋長富貴にして三年の貯有とぞ」とあつて、粟、稗、大豆、小豆のほか煙草まで栽培していたことがわかる。

本地方は樽前山の噴火による降下物（火山灰）の堆積が多かったため、農耕には恵まれた条件ではなかったであろう。しかし幕末期には各川筋のコタンでの畑作もかなり普及していた。安政四年（一八五七）の『入北記』によれば、ウエンナイ（植苗）では

「地味モ焼砂多ケレド此辺第一ノ所ニテ、土人ノ作りシ由ニテ畠地アリ。一見セシニインゲン、木瓜ノ類ハ可ナリニ宜シク、試ミノタメトテ植シニ穂ヲ胚シタルノミニテ霜ニ逢フタル由ニテ疾ニ刈リ取り置キタリ。併シ大豆、小豆ハ屹ト熟スル由、是又喜ブベキ事ナリ。」

とあり、また厚真川筋を探險した松浦武四郎の『東蝦夷日誌』に

「トンニカ村（從ニアツマフト凡六里、人家五軒）、土地高く肥沃、皆畑作をなしたり。…（中略）召連しエカシム家に宿す。隠元豆いんげまめを煮て出せり。…（中略）初夜頃に犬二匹頻に鼻を鳴らし来るや、其犬と共にエカシム弓を持って走り行しが、直に鹿二頭を得て歸れり。是は皆粟畑え来るを知らしに来る也と……。」

と記されている。

畑はコタンの近くに作られるが、その方法はすこぶる原始的なものであった。天明四年（一七八四）の『東遊記』によれば

「粟、稗、蕎麦、胡麻、苳、菜たね、いづれも出来よし。予がしりたるもの山畑の笹ある所を焼はらい、うない返しめせず粟をまきたるに、ことの外よく出来たり。飯碗に二三盃まきて、粟十八俵とりたるといふ。殊の外よく出来たり。糞いらす、御年貢も出さず、耕耘勞煩なし。」

とある。このようにアイヌは耕耘もそこに播種し、肥料も神の賜物に対する冒瀆ぼうとくであるとして一切行わなかったから、二、三年してまた次の豊沃な土地へ移動して耕作した。耕耘農具には鹿の角または木の枝で作ったシツタプ（土掘り具）、本州よりの移入品であるタシロ（山刀）もしくは出刃庖丁、イヨクペ（鎌）、クブカ（鋤）およびアレウエマタリプ（こまざらい）などのほか、粟や稗の收穫に穂を刈り取る用具としてピバ（貝）を利用した收穫具があった。

また農耕に従事するのは、もっぱら主婦や老人に一任された。狩漁が男子の生業であったのに反して、農耕は女子の家事労働の一つとして営まれたのであった。したがってアイヌの農耕は、あくまでも狩漁生産物の不足を補う、補助的な生産手段にすぎなかった。

農耕による生産物がアイヌの補助的食料となつたほかに、アイヌはそれ以上に野生の植物の葉、根、果実などを主



アイヌの農耕、収穫（文化年間・蝦夷生計図説）

食の補助や、副食あるいは嗜好品として用いることが多かった。林善茂によれば、食料として利用された確実な野生植物は、一二〇種以上を占めているといわれる。⁽²⁾『東蝦夷地各場所様子大概書』にユウフツ場所のアイヌが「うはゆり、ふくしや等を取、糧にもする也。」と記されているように、当時東蝦夷地のアイヌは盛んに野生植物を利用していた。同書に見られるものには、つぎのようなものがある。

プクシヤ アイヌ語プクサ *pukusa* で、ぎょうじやにんにく、一名キトビルと言われる草の茎葉の事である。

シケレベキナ アイヌ語シケルベ・キナ *sikerpe-kina* で、和名を「ぎぜんそう」という草の葉を指したもの。

ピットク アイヌ語のピットク *pitok* で、和名「はなうど」の根生葉の葉柄を指す。

トレプ アイヌ語のドレプ *turep* 和名ではおおうばゆり（姥百合）の鱗茎をいう。

千歳地方のアイヌの食用植物について、『千歳市史』は、つぎのように掲げている。

茎や根を食べる野草

あざみ、二輪草、ゆきざさ、行者にんにく、こじゃく、みず、たねつけはな、たちぎほうし、かたくり、ざぜんそう、あまにう、うど、あかざ、いらくさ、くさそてつ（こごみ）、ぜんまい、たらの芽、やどりき、こうほね、あさづき、のびる、

鱗莖や塊根

うばゆり、くろゆり、くるまゆり、かたくり、えぞえんごさく、きはなのあきな、ばあそぶ、おにのやから、からはなそう、ひるがほ、つりがねにんじん、つるにんじん、さいはいらん、アイヌわさび、

実を利用するもの

栗、胡桃、どんぐり、こくわ、やまぶどう、またたび、桑の実、いちご類、ふつきそう、えんれいそう類、えぞこりんご、菱の実、きはだの実、笹の実、まだいおおの実、

四 交 易

アイヌは狩猟や漁労および農耕や野生植物の採取などによって衣食住の資源を獲得したが、それ以上に、近隣異民族との交易に依存するものが多かった。もともと地域を異にするアイヌ同志の間でも、生産物に差異があったから、互いに生産物を交換し合って、不足を充たしていたが、異民族との交易に比較すれば、内容や規模からみて微々たるものに過ぎなかった。

アイヌの交易の相手は、大まかにいって二つあった。一つは本州ないしは松前地の和人であり、他は大陸の沿海州の住民であるギリヤーク（山丹人）との、いわゆる山丹交易である。特に影響力の大きかったのは和人との交易であった。これについては古くから互いに津軽海峡を越えて、盛んに交易が行われていた。室町中期の『十三往来』によると、当時はすでに松前付近のアイヌが奥州津軽外が浜に往来交易し、津軽の十三湊には夷船、京船が郡集して、おおいに賑ったと記されている。その後、和人の勢力が増大し、道南に小豪族が館たてを築くころになると、交易の中心地は津軽海峡を越えて渡島半島の南部に移り、松前氏が覇権を確立するようになってからは大館（のちの松前）の港が

中心となった。天和四年（一六一八）に北海道に渡ってきた耶蘇会宣教師アンジェリスの報告によると、当時松前に集まる大船は毎年三〇〇艘を数えたといわれる。

アイヌと和人との交易には、二つの形態があった。一つはアイヌが松前城下に出かけて交易を行うものでウイマムと呼ばれ、他は和人がアイヌの居住地である商場、あるいは場所に赴いて交易を行うもので、これをオムシャと呼んだ。まずウイマムについて『北海随筆』には

「春毎に産物を船にのせて松前に来り領主え礼をつとむ。其有りさまはなはだ恐れつつしみたる様体なり。松前え着船して木屋え上り、休息の内もいまだ目見すまざるうちは外へ出ず、酒もりもせず、あきない等もせずして隠便なり。：（中略）：目見済でよりは町えも出て商ひをとするなり。遠蝦夷は年には不来、近蝦夷のみ春毎に来れり。」

といい、また文化五年（一八〇八）の『渡島筆記』には

「曾てオトナ一世に一たび松前にいたり、領主に見る例なり。各その土産を齎て庭実（注、みやげ）となす。これをのする舟をば殊更に飾をなしてウキマムチブと名づく。もし和語によりて強解せば、初見に近かるべし。夷人の老たるものが、此事松前にとどまらず、古しへはシャモムシリへも斯の舟にて貢物を献りしと伝ふといふよし。」

と記されている。ウイマムは邦語の「初見」もしくは「お目見得」の転訛といわれている。元禄五年（一六九二）の『松前主水広時日記』に

「五月廿三日

厚谷又左衛門、大久保幸助商場しこつの夷御目見。差上もの被下物……。

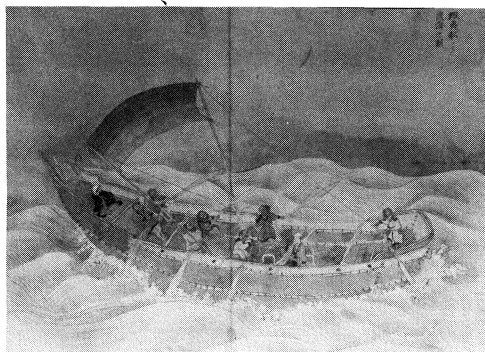
六月五日

今井孫七郎支配所しこつの夷御目見罷登、差上物被下物有之……。」

などと記されているように漁閑期を利用してウイマムに出かけたのである。

つぎにオムシャとは、和人が蝦夷地にやってきて交易する際に、アイヌが和人に対して久濶きゆうかつの礼を意味しているウムシャ umusa（互に・頭、手をさすり合う）の転訛といわれている。すなわち和人がアイヌに対して贈物をし、その返礼としてアイヌが和人に贈物をするという贈答は、形の上では儀礼であるが、事実は交易そのものを目的としたものであった。すなわち『蝦夷草紙』によれば「米、酒、煙草外諸品を土産物と名づけて賜ふ。夷人も貿物にする故其報に土産を出す」と云ふて交易する也。」といい、また『渡島筆記』に「春始て和船来り、互に安を問ひ、恙なきを喜び、一礼を述べ畢て、扱今年の漁獵の時至れり。務て懈ゆるることなかれ。近邑とも睦むつび、争訟などをいたさすべからず、いづれかたにても難船あらば、出て救ひ助けよ。幸なりとして賊をなすことなかれ。などといふことを念頃に喻し、扱酒二椀づつをのましめ、烟草たばこ、煙管等をそれぞれにあたふ是なり。」と記しているように、アイヌは彼等の習慣による丁重な儀礼と誠意を表す贈物の交換であった。このようにウイマムにしろオムシャにしろ、和人がアイヌに対して贈物をし、その返礼としてアイヌが和人に贈物をするという贈答は、形の上では儀礼であるが、事実は交易そのものを目的としたものであった。

この交易によってアイヌは酒、米、麴、煙草、煙管、鍋、小刀、針、古着、漆器、耳輪などを移入し、和人に対しては乾魚、魚油、獣皮、たか、わし羽、蝦夷錦、樺太玉などを提供したが、蝦夷錦、樺太玉など山丹交易によって得たものの中に含まれていた。



蝦夷船（寛政11年・蝦夷島奇観）

しかし、その後場所の経営が商人の手に委ねられるようになると、本来のウイマム、オムシャの機能はしだいに失われて政治的色彩を帯び、遂には統治の一手段に変質してしまった。

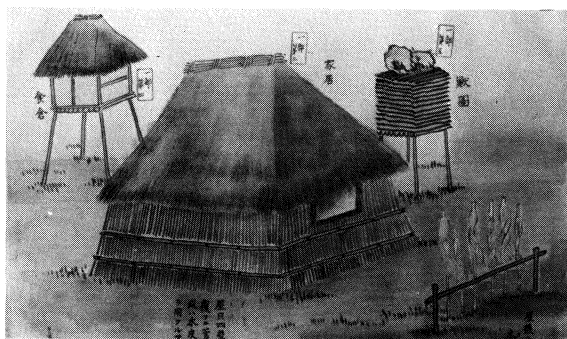
五 住 居

アイヌは本来、冬と夏の二つの生活のリズムがあつて、コタンの位置も住居も季節によつて変化した。冬場のコタンをマタコタン（冬の村）、夏場のコタンをサクコタン（夏の村）と言ひ、それぞれ違つた住居が営まれた。冬の家はトイチセ（土の家）と言つて竪穴式に作られ、夏の家はサクチセ（夏の家）と言われて平地式であつたらしい。幕府の役人松田伝十郎が、樺太で越冬した記録『北夷談』（文政五年、一八二二）によれば「土人穴居の事は海岸を去て山中に入て穴をほり、其上をかきあげて室のごとくにして横に煙出しの穴あり。此内に入て住居をなし、場所に寄ては夷人に限らず番人も穴居をなす。」と記し、また津軽藩士山崎半蔵が、エトロフ島に渡つた記録『毛夷東環記』にも「八月九月に至、冬住居の家を別に手入す。風の強きを恐れ、悉く□□なしに、壁より棟へ直葺綴る也。其上四方より壁に土掻き寄、勢（い）穴居の躰に住居也。」として穴居の事実のあつたことを記している。

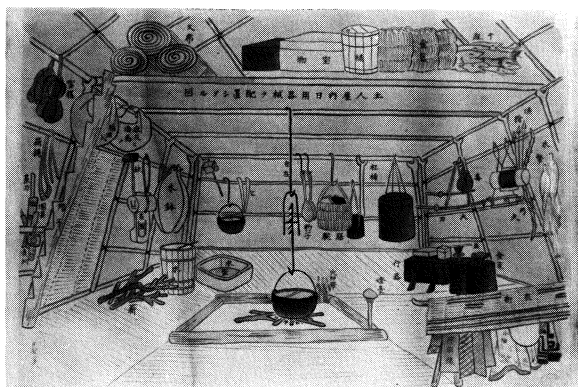
また間宮林蔵は樺太の穴居の作りかたを『北蝦夷図説』（安政二年、一八五五）の中で

「穴居を製する法、先山に添ふて地を掘み、土を堀こと凡三、四尺計、其内に図のごとく柱を立、屋を覆ふに木の皮を以てし、其上に重ぬるに草木の葉枝を以てす。戸口の上に庇を設け、内に入る処は階子をかけ、其側竈を作り、竈中より穴を穿て家外廬下に堀りぬき、炊煙の屋中に鎖すを忌みて、此穴より家外に出し去しむ。」と記している。

しかし、このような冬の家と夏の家をもつ生活は、農耕の普及とともに定着化が進み、竪穴住居も樺太や千島方面



アイヌ家 (明治・蝦夷風俗図) [北大北方資料室]



アイヌ家屋内の図 (明治・蝦夷風俗図)
[北大北方資料室]

にのみ行われるようになり、北海道における近世のアイヌの冬の家（竪穴住居）は、文献の上で見ることはいくつかできない。したがって北海道におけるアイヌの住居（チセ）は、すべて夏の家に属する平地住居である。

アイヌ家の平面形は七メートルに五メートルぐらいの長方形で、東西に長いのが一般的である。これに二メートル四方ぐらいの物置兼作業場の入口がついている。居間は仕切りなしの一間で、中央に炊事兼暖房用の炉（アペオイ）がある。床は土間の上に乾草を敷き、さらにゴザ（キナ）を敷く。柱は掘立柱で、屋根や壁は茅、笹などを束ねてしぼりつける。窓

は三か所ある。東側には神々が出入したり獲物を入れたりする神聖な窓（ロルンプヤラ）があり、南側には横窓（エトムンプヤラ）と小窓（ボンプヤラ）があるが、小さな家の場合は横窓一つである。また炉の真上には煙出し窓（リクンプヤラ）がある。入口（アパ）や窓には葦や茅で編んだすだれを垂らし家内の壁にはキナを張りつけた。炉の上には乾燥台（火棚）が作られる。家に付属した施設としては、戸外に高倉（プー）、魚干場（クマ）、熊の檻（ペウレプセツ）、便所（アシシル）が

あり、東側には幣場（イナウチパ）がある。また狩猟にでかけた時に使用するために、仮小屋（カシ）を作る。人数よって異なるが、九尺四方位の大きさと言われている。

六 衣服と装身具

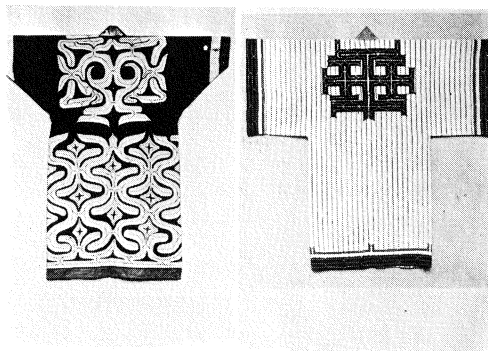
アイヌは古い時代に、熊、鹿、犬、狐、あざらし、水鳥、鮭、イトウなどの皮や羽毛を利用した衣服、すなわち獣皮衣（カプル）、鳥皮衣（ラプル）、魚皮衣（チェプル）などのほか、草を編んで作った草衣（チラ）などがあつたが、居坐機いざだの技術の輸入によつて、オヒョウ、ハルニレ、シナノキの樹皮やイラクサの繊維で糸を作り、アツシ布を自製して衣服を作つた。『北海随筆』によれば「衣はヲヒヤウと云木の皮を以てメノコシ手織にし、是をアツシと云。メノコシとは女の方言なり。また獣の皮をも着し、あるにまかせたる体なるは寒暑あへておそれざる故なり。」とあり、また『蝦夷草紙』には

「蝦夷人ども草履ぞうり、草鞋わらじ、蓑わらじの類ひを用へず、旅をするに、アツシといふ單物を着用し、帯は有合のもの、繩にても藤葛むじなづの類ひにても用へるなり。火打道具の入れ物、カロブといふ。菅にて編たるとうらんと、弓矢・きせる・煙草入のみ持歩行くなり。笠・合羽・股引・脚半・手拭・足袋・腰帶・矢立・野羽織・弁当の類ひ、決してなき事なり。」と記している。

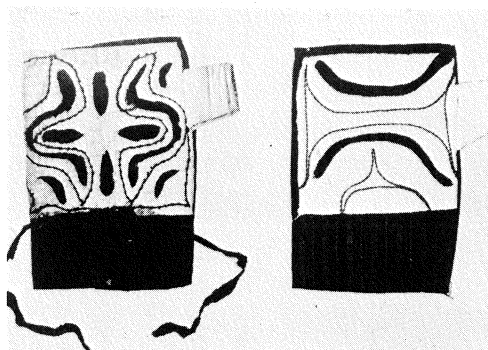
この地方のアイヌについては『東蝦夷地場所様子大概書』に

「女は場所により作物をも少々仕付…（中略）…厚子を織、男女着用にする也。」

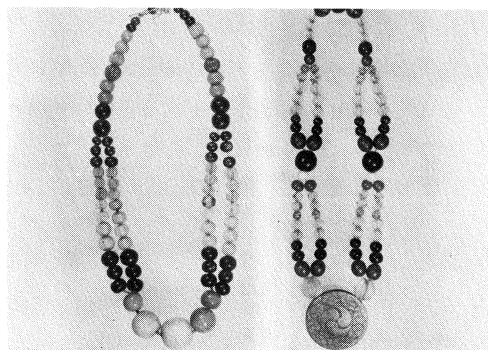
と記し、また寛政十一年（一七九九）、蝦夷地を調査して勇武津（勇払）の地に宿泊した澁江長伯は、『東游奇勝』の中で、勇払のアイヌの織物について



衣服 [工芸 (アイヌ号)]



ライクル・ホシ [アイヌ民族誌]



タマサイ [青少年センター]

と記している。

又赤タマの皮にて織るをニイカッフとも云。アツシより色赤し。」
「夷人織ところのきな蓆はフトイなり。フトイを持名を尋るにキナなり。蓆を織る物と云。其法は夏月刈取り熱湯をかけて日に乾し上、メノコの細工に織る。赤と黒とに染分けて織るをアヤキナと云。アツシ布はラヒヤウの木皮を五月頃むき取、水に漬て日に乾し上げ、細にさき、よりかけ□をうむ様につき機にかける、さをに通し長きまま先を結て張り置て織る。織るに従ていきりながら先に出る。」

アイヌが木綿類を着用するようになったのは、それまで狩猟で得た毛皮類を交換品にふりむけて、本州や満州方面

から木綿衣や絹衣などの古着を入手した結果によるものである。すなわち交易によって、本州からは小袖や陣羽織、中国や満州方面からは樺太を経由して山丹錦、蝦夷錦、襦袢錦と称せられた山丹服を入手した。

またアイヌは本州の木綿、糸、針、はさみなどを移入するようになってから、アツシや木綿衣に大胆な模様が施された切伏衣（チカルカルペ）や、刺しゅうのある縫取衣（ルウンペ）を作るようになった。

肌衣（モウル）は女子の肌着で、以前の獣皮から木綿に変わった。男子の褌（テパ）は和人のものと同じで、女子には貞操帯（ボンクツ、ウプソル）といわれるものがあるが、これは実用よりむしろ象徴的、精神的な意味をもつ紐で母親から娘へと同じ家系を辿って伝えられた。

衣服の付属品としては帽子（コンチ）、手甲（テクンペ）、脚絆（ホシ）、前垂（マンダリ）、鉢巻（マタンプシ、チパヌツプ）、たすき（イタスコ）、帯（クツ）、笠などがある。足にはくものはケリと称し、千歳地方では、夏用にばつこ柳やぶどうづるで編んだシトケリ（ぶどう皮靴）、冬用にはチエプケリ（魚靴）、ユクケリ（鹿靴）があった（『千歳市史』）。

装身具としては首飾り（タマサイ）、耳輪（ニンカリ）、腕輪（テクンカニ）などがあるが、その材料の多くは本州や山丹交易による外来品である。

七 食 生 活

漁狩猟を中心とした生活では、当然食生活の主なもののは獲物によってまかなわれた。最も重要な食資源は鹿と海獣と鮭、鱒で、これに野草の茎葉、根茎、果実および海藻（のり、こんぶ他）であった。最上徳内が『蝦夷草紙』に「……只魚肉、獣肉を食物とす。其外草の根に食するもの二、三種あるのみなり。」と記したほど、いかに漁狩猟に依

存したかが理解できよう。享保八年（一七二三）秋に千年川（千歳川）の鮭が不漁のためシコツアイヌに多数の餓死者が出たのも、この辺の事情を如実に物語っている。

調理は焼く、煮る、塩づけ、燻製、乾燥などによって行われたが、時には生のままで食べることもあった。『千歳市史』によれば

「動物の内臓の多くは生のまま食べることが多かった。肝臓、心臓、肺、胃、腎、横隔膜ばかりでなく、耳の軟骨、鼻端、眼玉、舌骨、脳漿などである…（中略）…

鮭や鱒は氷頭、鰓蓋、鰓、中骨、眼球、背鰭、胸鰭、尾鰭、白子や心臓までほとんど日本料理で捨てるところばかりを細く刻んで、塩味にしたチタタブ（我々が叩き叩きしたもの）といふ料理もあった。」

という。

鮭や鱒などの川魚は、一度に豊富にとれるので、これは乾魚・凍魚・燻製として冬期のために貯蔵した。

野草や果実は生食のほかに火食し、また乾燥して貯蔵し、これも冬期の食料とした。特にうばゆりの球根は、重要な食料で、つき碎いて澱粉をとり、粕を煮沸して団子にし、乾燥して冬期の食料にした。

食事は普通朝食と夕食の二回で、主として肉食であった。中食は野草を入れた穀物の粥などを作ったが、これをラタシケツプと称した。江戸時代に原始的農業が普及したことによるものであろう。この食事について、宝永七年（一七一〇）の『蝦夷談筆記』は

「朝夕の食事鳥魚のみ用申候。たまたま米を求候て食を給候得ば、食をば此方の菜の様に仕候て給申候。昼は八時分一度たべ、夜は日暮より九時分迄の内、五、六度も給申候。昼は仕事の障に成候由にて給不申候由の事。」

といい、また寛政二年（一七九〇）の『蝦夷草紙』は

「蝦夷人の食事は碗^{わん}でつにて、膳^{ぜん}を用へず。汁菜の類ひ食せず。味噌、塩、醬油の類ひもなし。故に魚肉・獸肉・草の根、都て真水にて煎て食す。或は又海水を少し用へて塩梅^{かんばい}をする事もあり。又食事をするに、時も定らず、昼夜に限らず、好みに隨ひ食す。食物の有る時は、終日終夜食し、食物無き時は、二、三日も食せざる事あり。然れども敢て食を欲せず。」

と記しているから、古い時代はやはり朝、夕の二回の食事だったらしい。

食事の時刻は、朝食は山狩りに行く時は早朝、日の出る前、午前三時〜四時ころだが、普通は八時ころで、朝起きてからひと仕事した後で食事するのが一般的であった。夕食は日暮れたころ、あまり暗くならないうち、夏は七時ころ、冬は五時ころが普通であった。

酒は本州渡来の清酒のほかに、自製の濁酒があった。前者を単にサケというのに対して後者をトノトといった。酒の原料としては、稗^{はい}、粟^もが古来からのもので、次第に米も使われるようになった。酒の醸造の順序は今日の甘酒を作るのと大差がない。糲^さは和人との交易によって得たが、古くは粟、稗などでつくった自製のものを使った。

お茶は無かったが、なぎなたこうじゅ、いそつつじの枝葉、こぶしの梢^{こぶし}の皮を鍋で煎じて飲用したという（『千歳市史』）が、これは飲用するばかりでなく、風邪薬や胃腸薬としても利用したのであった。

このほかに春の雪解けごろ、いたや、かんば、くるみの木に傷つけて採取した樹液を飲んだり、煮つめて濃い汁にして砂糖の代用として料理に利用した。

また嗜好品として煙草は、本州や大陸より交易によって手に入れたが、千歳では石楠花^{しきんか}の葉を乾しておき、これを煙草のようにして吸ったという（『千歳市史』）。

八 信 仰

宝永七年（一七一〇）の『蝦夷談筆記』に「神祀無之候。神の事をカモヒと申候て、何の神を敬候や、山、海、火に向て敬拝申候。」とあり、また文化五年（一八〇八）の『渡島筆記』には

「カムキ或はカモキとは我国にて神祇上髪かみの類又痘鬼魑魅も同じく某のかみといふかごとく、すべて鬼神、高貴の人、崇尊すべき畏懼すべき物みなしかいふ。山に往て木を伐らむとして山の神を祭伐りて材を得て其株を祭。將に獵せんとして山嶽を祭り、漁に海河を祭（り）、新に網を結（び）、舟を造りて祭（る）。漁獵久しく幸なければ祭る。」

と記しているように、アイヌの信仰は天地自然一切の事物に神の存在を認める、いわゆるアニミズム（精霊崇拜）の立場にあった。これは彼等が食料資源の大半を漁狩獵と野生植物に依存し続けてきたという生活基盤の上に立っているからであつて、このような関係を知らない限り、彼等の精神生活を理解することはできない。

ではアイヌの信仰する神（カムイ）とはどんなものであろうか。金田一京助は次のように述べている。

「もつとも神かみといつても万能の神ではなく、ごく人間に近い、欲もあり、見えもあり、おだてにも乗り、だましもきく、アイヌそのまの正直な、子供らしい、罪のない神たちである。そのカムイという言葉も、元来不可思議なある力に対する驚異の称にすぎない。彼らの子供のような目、子供のような心には、森羅万象とりどりに不可思議ならざるものがない。だからカムイの称があらゆる物に冠かんらされる。彼らの祈詞の常套語に *chinomi kamui inne yakka*.（「我らのおがむ神は、数限りなれども」と言うように、まこと3に彼らの礼拝する神は無数である。」）

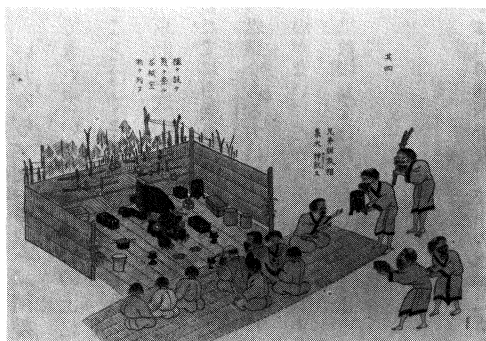
と言ひ、さらに

「アイヌの世界では棲息する天地、休息する家、使用する器具、一に神である。獵に出では山の林へ祈り、枝川の水神に祈り、沖へ出

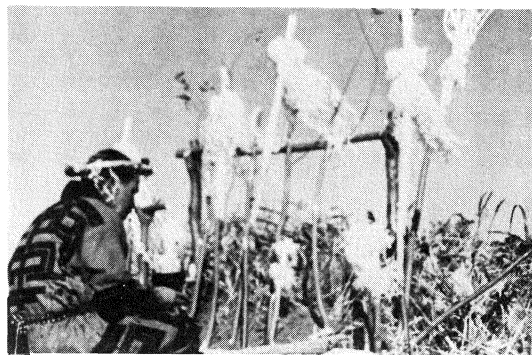
て、風に逢つて祈り、雨に叩かれては祈り、波に脅かされては祈り、獵が無ければ、有る様に祈り、有れば有った喜びを告げて祈り、家に居ても、不幸に祈り、喜びに祈り、変災に祈り、病氣に祈り、イナウを撞けば祈り、酒を得れば祈る。イナウと酒とは神様の一番喜ばれるものであるからといふ。かうしてアイヌは居ても起つても、神様と共に暮しているのである。⁽⁴⁾

と述べている。それでアイヌは天地、山海、森野、川沼いたるところに善神や魔神がさまよい住んでいると考えていた。だから善神にはこれを祭ることによつて、その神の歎心を求め、時にはおだてさえして人間の生命や生活を守り、多幸を招来するよう祈願する。魔神に対しては、これをなだめすかし、時には威嚇して国土の果に放逐して、その災厄から免れようとしたのである。たとえばイヨマンテ（熊祭り）といわれる儀式も狩獵と結びついた信仰であるが、神（カムイ）の子である仔熊を飼つておき、賓客として部落を見聞してもらつたあと、人びとが山狩りした時にはきつと獵運があるようにと、お土産を持たせて神の国へ送り返してやるという意味なのである。

神を祭るところを幣場という。幣場は各自それぞれ家の東側に設けられた。各自の幣場に設けられる祭壇の形式は地方によつて若干の相違があるが、千歳地方では向つて左端にヌサコルカムイ（幣場の神）、右端にワツカウシカムイ（水の神）を祭るといふ。鶴川のチンコタンでは、左端にヌサコルカムイ（幣場の神）次にシランパカムイ（大地の神）、次にハシナウコルカムイ（枝幣の神）、最右端にワツカウシカムイ（水の神）という順序に祭つていた。また屋内にはアペカムイ（火の神）が、炉の中央の燃え上がる火炎の下に、黄金づくりの家を建てて住んでいる。炎と熱はこの神の



イオマンテ（寛政11年・蝦夷島奇観）



シシャモカムイノミ〔アイヌ民族誌〕

作用だと信じている。カムイノミ（神祈り）をするには、まずの神にイナウ（木幣）を削り、酒を捧げて祈詞を述べ、火の神を通じて戸外の幣場のそれぞれの神に祈るわけである。

また部落で共同の祭事を行う場合には、特定の場所に幣場が設けられ、部落の長老によってカムイノミが行われた。たとえば鶴川河口のムレトイエの丘で行われたシシャモ漁について、『鶴川町史』は、

「ムレトイの砂丘に集った人々はそこに炬を作って火を焚き、炬の東側に祭壇をたてる。ムレトイの狐（チロンヌツプカムイ）、沖の神（トマリコルカムイ）、川の守神（ベツコルカムイ）、川瀬の守神（チワシコルカムイ）、飲水の神（ワツカウシカムイ）、ハシナウカムイ（かけす）等々の神々にイナウを捧げる。この祭に招かれた者は、先づ炬の火の神に挨拶し、その後人々に挨拶する。四人一組になって人々は静かな声で一緒に各神々に祈りを捧げる。シシャモ漁の終わったあとも川原に火を焚いて、ベツコルカムイの祭壇（ヌサ）を作り、ヤツタサシサムカムイノミ（お礼のシシャモ祭）をする。」

と記している。

前述のように神に供える重要なものはイナウ（木幣）がある。イナウはシコロ、ミズキ、ヤナギ、ドスナラ、ナナカマドを材料として作る。イナウは酒と共に神の最も喜ぶものとされ、神の国ではシコロのイナウはコンカニ・イコロ（黄金の宝物）、柳のイナウはシロカニ・イコロ（白銀の宝物）になり、沢山持つ神ほど神の国では偉い神とされる。それゆえ神もますます獲物の姿をしてアイヌの部落を訪れるようになるとされている。

このようにアイヌは山狩りをする時は、キムンカムイ（山の神＝熊）に、鯨

が浜に寄つた時はフンペカムイ（鯨の神）やレブンカムイ（沖の神）に、樹木を伐る時はシランパカムイ（木の神）に、また家を新築した時はチセコルカムイ（家の神）にとカムイノミをするなど、あらゆることで神とのかかわり合いのないものはない。特に狩猟とかかわる祭事にイヨマンテ（熊祭り）と呼ばれる祭儀のあることは既に述べた通りである。しかしイヨマンテとは本来は *ioman-te* それを・送らしめるという意味で、熊に限ったものではなかった。

鷓川流域でイオマンテをするものには、熊（キムンカムイ）をはじめ、シマフクロウ（コタンコルカムイ）、鷲（カバチリカムイ）、黒狐（クンネチロンヌツプカムイ）、狸（モユクカムイ）のほかカジキマグロなどがあり（『鷓川町史』）、千歳地方では熊、シマフクロウ、鷲、狐、貉、犬などがあつたが、特にシマフクロウは大事な神とされ、丁重に送られた（『千歳市史』）。

以上の神のほか、アイヌにはパセオンカミ（重い礼拝）と呼んで、家系ごとに祭る秘神ともいうべき神にカムイノミをすることがある。『千歳市史』に「第五発電所の下のヌポリボクという山の崖、またはモペツと千歳川の中峯の磐跡、築をかけるポロプイラの滝、または日高貫気別の奥の大山は、ある人の先祖がここから出た熊であるとして、この山に酒をあげる人もある。」と記しているように、日高貫気別の奥の大山の神にパセオンカミする家系のあることがわかる。これについて名取武光によれば、千歳川筋のウサクマイコタンでは、パセオンカミとして日高と十勝の国境にある幌尻岳のポロシリカムイに対して礼拝し、ランコシではパセオンカミとして、パコロカムイすなわち疱瘡神を礼拝している。またカマコタンの旧家系に属する人はパセオンカミとして、日高の平取川の川上にあるウラシヌブリを礼拝していると述べている。⁽⁵⁾

九 結 婚

昔のアイヌ社会では、本人同志の意志によって結婚する場合もあったが、親同志の約束で決められることが多かったようだ。沙流アイヌのユーカラ（英雄詞曲）の中に

「ソモカ タプネ

よもや

ホクサク スクプ

夫なしに暮して

エネルウエカ

いるようなことは

ソモタパンナ

できません

シヌタブカ

シヌタブカの

カムイネアンクル

神のようなお方の

オマヤルペ

むつきの

エムコサマ

はしそばに

アイヨレス。

貴女を育てました。

（『アイヌの叙事詩』）

という一節がある。これは兄が妹の余市媛を諭した言葉であるが、生まれおちてから双方の親たちの間に将来結婚させる約束をして育ててきたという事で、これがアイヌの古俗であつたらしい。そして年ごろになつてから許嫁であることがわかれば、愛を表すために男から女には女子用の鞘、糸巻き、糸入れ、機織り具の箴わさ、首飾り、耳輪の片一方を、女から男へはコンチ（冠物）、マタンブシ（三角頭布）、脚絆、手甲、刺しゅう衣、アツシなどの贈物をした。

村尾元長の『あいぬ風俗略志』によれば

「アイヌ妻を娶るときは、里方へ宝物即ち太刀・鐔・行器・酒器等を贈物として遣すを例とす。里方にて其贈物に不足を感じる時は、増加を談判することもあり、宝物を所持せざる貧乏人は一生涯妻を娶ること能はず、恰も品物と女と交易するに似たり、而して、此宝物は嫁が不縁にて離別になると、里方より返付するを例とす。」

とあるが、これは仲人の媒酌による結婚の形式である。嫁入りは娘一人で旅行袋（ケトシ）に衣類その他を入れて背負って出かけることもあり、近親者や仲人に連れられて行くこともあった。嫁入り婚というべきものである。

これに対して語り物や昔語の類には、求婚の手段として男子が娘の家を訪問する。娘はとりあえず御飯を炊き、高盛りにして男子に差出すと、男子は箸でかき崩して半分ぐらい食べ、その残り半分を娘に与える。娘がうやうやしく受け取って食べると、求婚を受け入れる意志表示になる。これをウエチウ・イペ（固めの食事）という。これがきつかけとなつて青年はたびたび訪れ、時には狩猟に出て鹿や熊を獲つて娘のところへ提供した末、やがて娘をつれて結婚生活にはいる。『あいぬ風俗略志』に

「結婚の法は男子より婦人の家に二、三月乃至一、三年も同居して仕事の手伝を為し、其上にて婚儀を申込なり。彼承知すれば宜し、不承知なれば縁談整はずして其家を去る故に、中には何年間手伝労働せしに依り、其報酬を得んとて、苦情の起る事などあり。結婚すれば、直に家を建て、別居し、親子二夫婦同居することなし。」

というように、これは婿入婚といえるし、また労働婚ともみられるが、この形式は最も原初的結婚形式とも考えられている。⁽⁶⁾

また、ここで注意すべきこととしてアイヌの通婚圏の問題がある。宝永七年（一七一〇）の『蝦夷談筆記』は「蝦夷人は父子兄弟も相嫁候。兎角一類の内にて縁組仕、他人不^レ交様に仕候。」

と記し、父子姉妹の相婚時代があったかのごとく伝えているが、はなはだしい誤伝である。アイヌには結婚にあたっては厳しい禁忌^{タブー}があった。すなわち沙流アイヌでは、生母と同じウプソルンクツ（貞操帯）の女とは結婚できないこと、父が兄弟である「いとこ同志」は結婚できるが、母が姉妹である「いとこ同志」の結婚は、ウプソルの関係から禁止された。⁽⁷⁾もしこの禁を犯して結婚すると、セタプリ（大たわけ）とのしり村を追放したり、川尻のつまった川口（オプツサツク・ナイ）のような所に住ませて、子供を生ませないようにという呪いを課せられた。⁽⁸⁾

♂	♀	
実 父	娘	×
息 子	実 母	×
息 子	義 母	×
実 兄 弟	実 姉 妹	×
甥	父 方 の 叔 母	○
	母 方 の 叔 母	×
父 方 の 叔 父	姪 姪	○
母 方 の 叔 父		×

○は結婚可
×は結婚禁

久保寺逸彦「生死・冠婚・習俗行事」
『アイヌ民族誌』による

一〇 出産・成人

アイヌは安産のために、種々の呪術を行った。千歳や鷗川では、熊の小腸を産婦の腹に巻いたり、持ったりする呪術があった。この理由は、熊は出産の時に軽いものだからということである（『鷗川町史』、『千歳市史』⁽⁹⁾）。

出産時には産婦は梁から負縄（タラ）を吊下げ、それを力綱としてすがって分娩する。アイヌは職業としての助産婦はいなかったから、経験のある女二、三人が介抱するが、この時カムイノミ（祈願）する古老を除いては、産の場所に止まることを許されない。

古老は用意されたイナウと酒を供えて安産を祈る。祈る神々はアペフチ（火の姥神）、ウワレカムイ（産神）、アパマカマツ（戸口の神）で、難産の時は、さらにミントルコルカムイ（庭の神）、アシケタンネマツ（指長姫）に祈願し、あるいは立白を土間に転がし、妊婦に空白を搗かせるなどの呪術的儀礼を行う。

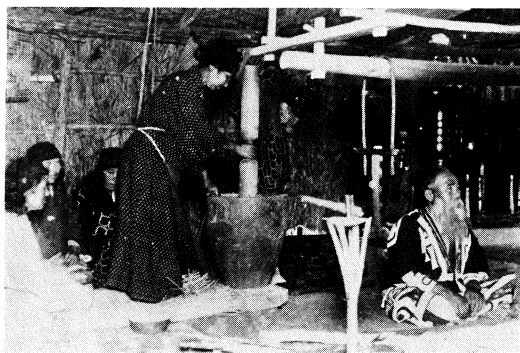
出産が済めば、また神々に報告感謝の祈りを捧げる。

命名は生まれて何日目にするというきまりはない。魔神の目を逃れて無事な成長を祈るため、わざわざ悪名や汚れた名をつけたり、その赤児の特徴、行動とか周囲の印象的出来事から選んで命名したようである。『千歳市史』によれば

「子供は成るべくきたない名で呼び、テイネ・シ（ぬれたうんこの意で、まだ坐れない子供の呼び名）とか、シヨクタク（うんこのかたまりの意で、坐れるようになった子供の呼び名）などという。それはきたない名で呼ぶと、病気がきたながつて子供に手をふれないというのである。」

という。

成人、今でいう成人式のようなものはなかったが、一五才ころになると男女とも一人前になって頭を人並みにする。衣服も大人の服となり、男子は褌（テパ）を、女子は肌着（モウル）を着ける。また女子は入墨（いんぼく）をする。この地方で



出産のための呪術〔アイヌ民族誌〕

は、一三才位から始め一五、六才ころに完成するという。さらに女子はこのころになると、ラウンクツ、またはウプシヨロという下紐(貞操帯ともいう)を体に巻きつける。これは母親から巻いてもらうもので時期は一定していない。男子も一人前として扱われるから、祖父や父から自分の家のパセオンカミ(重い礼拝)の祭神名、祀りの由来、祭祀の仕方、さらに祖印(エカシシロシ、イトクパ)に関することや、家系のことなど教えられるのである。

一一 葬儀

アイヌの観念によれば病氣ないし死を生ずることは、悪神や魔神が善神たちの放心油断している際を狙ってやる悪戯によるものという。だから葬式は丁重な儀式をもって、できるだけ死霊の怒りを和らげ、なだめ、あるいはすかして他界へ送らなければならない。死霊は肉体を離れて他界に行き、先祖たちの許に到着すれば再び形骸を得て、この世そのままの生活を送ると信じている。元文四年(一七三九)の『北海随筆』は、アイヌの死者に対する習俗を

「医薬なき故、病を怖れ死を忌事甚し。病者あれば父子兄弟といへども捨置て山中へのがれ、死して後歸る。死者の取置は、新敷アツシを着せ、新敷むしろに包み山中へ送り、祕藏せし物ども不残ともに埋て、家は焼捨て、改め作りて居せり。壮年なれども死の用意は予じめ心懸置となり。死者の妻はかぶり物をして面をあらはさざる事凡数年、又再び嫁せず。」

と記している。

死者があつた時の葬儀は、およそ次のように取りおこなわれる。まず屍体は拭い浄めて死装束を着せる。着物、帯、手甲、脚絆、足袋などで、着物を男は左前、女は右前とする。

終えると刺しゅう衣を屍体の上にかける。供物を枕上に供え終ると、家族、近親、近隣の人たちが屍体のまわりに坐り、死者に対してライチシカラ(哭泣の礼)を行い、人々はウルイルエ(互に抱き合い、撫で摩り合う挨拶)という



墓地〔アイヌ民族誌〕



葬送後の家を焼く図
(寛政11年・蝦夷島奇観)

儀礼を行う。

凶報通知、墓標作り、墓掘りはコタンで分担して行い、死者との訣別の会食をする。これはその霊を慰め、不満や怒りをなだめ、生者に敵意を抱かないようにするためらしい。死者包装の時刻が近づくと、死者に対しての告別の辞（イヨイタクコテ）を告げる。この任には、儀礼に通じた堪能な長老が当る。まず火の神に、死者を送ることの万事を頼みつぎに死者に対し「あなたの手にした墓標の

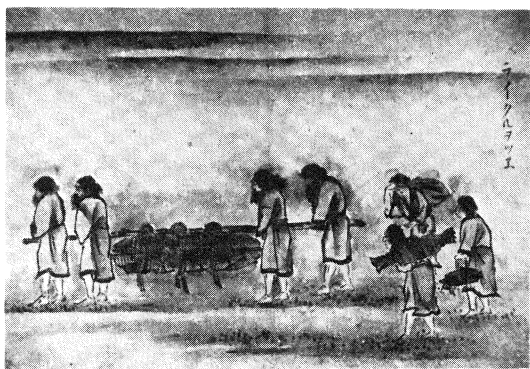
照らす白々と明るい道を、脇き目も振らず先祖の方々のいる神の国へお出で下さい」という内容の引導をわたすのである。

これがすむと屍体の包装（ライクル・オッシナ）にかかる。包装はキナ（ござ）で包み、いぬえんじゅで作った留針（シンニヌップ）で、ござの合わせ目を頭の方から足の方へ一本づつの合計一〇本で封じ込める。包装し終った屍の上に、さらにパラムリリとよぶ綱を頭の串からかけて屍体の包みをつくる（『千歳市史』）。

屍体の搬出は足を前にして常の出入口よりせず側壁を破って出し、出したらその穴をすぐ修理しておく。その出口をウエン・パ（悪い戸）という。搬出にはかき棒（オタニ・チクニ）に通し、近親の男子が二人づつ交替で墓地へ運ぶ。墓標は死者の案内人であるから、葬列の先頭に立ち、土中に打込む尖った方を先にして担ぐ。沙流ではこれに

の中に投げ入れる。副葬品を破壊するのは、死者の生前使用した物が破壊されることによって、その物の霊は形体から遊離することができて他界に行き、元の物体に再生して死者に使われるというアイヌの観念によるのだという。⁽⁹⁾屍体に土をかけたあとは、頭の方に墓標を立て、土を椀（イタンキ）に高盛りにし、墓標の正面に置き、空になった小行器（シントコ）を墓標の上から打貫いで墓標に通したまま残しておく。

埋葬が終わった盛土の上は、参列者の手印が残らないように、にわとこやいぬえんじゅの枝で掃き清め、後を見ないでまっすぐに家に帰る。



ライクルラツエ〔蝦夷古代風俗〕

続いて手向け水を運ぶ女、ござがますを背負う人（副葬品）、包装屍体を担ぐ人、以下遺族、親戚、村人その他と続く。

墓地（トシリ）は、部落の西南か西に位置するのが古くからの習慣で、屍を遺棄する（オスラ）所である。墓抔は死者の身長を測っておいて大き

さを決める。『あいぬ風俗略志』に

「穴は深さ一・二米、縦一・五米（死体に由り長短あり）、横九十糎（地方により同じからず）、北首、東首等地方に依り同一ならず。」

とある。墓抔を掘ったあとは

「墓穴の底などについた人間の足あとは、にわとこの枝で掃いて消し、底に割板を置き、その上に屍体の頭を東に向けて置き、かついで行つた棒を縦に置いて、それに両方から割板をたてかけて屋根のようにして、それに土をかける。」

（『千歳市史』）

葬式が済んでから行われる儀礼として、家焼（チセ・ウフイカ）ということがあった。『東遊記』に、「人死すれば其家をも調度をもみな焼すて、あらたに作りてすむといふ。」とある。これは昔、主人や主婦や老婆が死んだ場合に行っていたことが多いという。この理由は、死霊が立ち帰って祟りや禍いをするのを免れることにあったようだ。

二、三才までの子供が死んだ時は、墓地に葬らずに、家の中の片隅か、便所のわきに埋めるのが普通であった。変死人の場合は、魔神のなすことに原因するものと考えているから、屍体を屋内に入れることをしないで、悪魔を威嚇し、守護の神々の注意を呼び起すようにと、踏舞行動（ロルンベ・またはウケウエフムス）という呪術的な儀礼を行う。

死者を墓地に埋葬してからは、死霊の祟りを恐れてか、墓地に近づかず、したがって墓参りなどはしなかった。しかしアイヌは酒をつくった時には祖霊祀り（シヌラツパ）を行う。『千歳市史』によれば

「家の外の側窓のわきに、祖父や祖母（古い祖先にはやらない）、親しい死者の数だけチホロカケブという木幣を立て、男には酒と水気ない酒粕（ベツクルシラリ）、女には酒と水気ない酒粕（サツシラリ）を木幣の上にあげ、終るとチホロカケブは片付けて藪にもっていつて納める。」と記している。

一二 巫術と呪術

神に祈詞を捧げることは男の専門で、女は直接神へ物を言うことは禁忌とされていたが、神がかりで神意を述べることは、多く婦女子に限られていた。この婦女子をドスクール（巫女）といい、有事の時、その兄または夫、あるいは父によって直接に神へ呼びかけが行われると、たちまちその女が神がかりの状態に入って、口から神意を託宣するといふ。天明四年（一七八四）の『東遊記』に「婦女に巫の様な者あり、さまざまの術をなすといふ。」とあり、ま

た文化五年（一八〇八）の『渡島筆記』に「トシウといふは卜占にて何やらむ法を修するまねして忽人をしらざるごとく、狂せるがごとくにして事をいふ。和俗にくちよせなといへるもの、類に似たり。いふ所果して驗あることあり。」と記している。『千歳市史』によれば

「巫術をする人は首や手首を、削りかけと赤い布をより合わせ（白い布と赤い布でもよい）て玉を通したものでしる。これは憑神に対してのお札の意味があり、これをつけないと疲れたり、あと身体がいたんで憑神がきかなくなるといふ。蛇が憑神のときには胡桃くるみの木で削りかけをつくるという。これをつけると顔が紅潮して巫術歌がご託宣をはじめる。」

と述べている。ドス（巫術）は、その婦女子に憑神がのりうつつて託宣させるもので、憑神は熊・狼・狐・蛇などの動物神であつて、またそれはドスキル（巫女）の守護神ともなっている。巫術はユーカラ（英雄詞曲）などの謡物にも現れるが、これは北方諸民族に見られるシャーマニズムと深い関連があるといわれている。

呪術は天地の自然現象の中で、生活をおびやかしたり、危害が加わるといふ場合にそれを鎮めたり、防止するために行う一種のまじないである。『渡島筆記』に「日月の食（蝕）には戸々皆出で、天を仰ぎ呼ふて、エラキナー、ホーキヤ、ホーキといひ、ケマコルシンドコのパルペ、或はオツテキをうち敲き、明に復して喜悅してやむ。」とあるのは、日蝕の時の呪術の様子を記したものである。

この地方に行われた呪術には、最も一般的に見られる雨止め、雨乞いをはじめ、風呼び、風鎮め、雷除け、時化呼びなど天気に関するもの、日蝕、月蝕、津波除け、地震、噴火の際などに関するもの、火災を鎮めたり、悪い熊を追うなどのものがあつた。つぎにその二、三を挙げてみる。

雨止めのまじない。

「鶴川地方では長雨の時は、ドブコク酒を濾す時に用いる笊を持ち出し、屋外に二米ほどの四本の棒の中間を縛つて四又に開いて据



地震のまじない〔アイヌ民族誌〕

津波除けのまじない

（久保寺逸彦『呪術・巫術』昭和四十四年「アイヌ民族誌」）

え、その上に笹を雨を受けるように上向きに置き、笹の縁にはイナウキケをつける。酒造りの笹は神聖なものとされているものである。これで雨の神（ルヤンベカムイ）に挑戦しようとするもので、その祈り言葉は、いま火の神に頼んでこの笹を持って来たから、雨の神はこの笹に一杯になるように雨をふらすがよい。とうていお前の力ではこれを満たすことができないから、もうそろそろ降参するがよいという意味を述べ、ここの笹を雨が晴れるまで屋外に放置する。」

「鶴川地方では津波が襲来するかも知れないという予測は、誰かの夢枕に立ったり自然界に何か異常なことがおこるとされ、古老がこれを判断してコタンが動揺し、津波除けのまじないをする。この時の祈りは、海の大波に頼んで津波がコタンまで押し寄せないように願うのである。このまじないはコタンの者が波打ちぎわに集まって行われる。各戸から破損して不用になった家財道具と、搦いてないひえを唐箕（ムイ）の中に入れて浜辺に持参し、古老の指揮で浜の波打ちぎわに海岸線に平行して、砂で高さ〇・五米、長さ約二〇米の波型の畦を六本作り、畦と畦の間に古道具とひえをばらばらに置く、六本作る意味は、アイヌには六という数字は多いという意味を持っているからである。

この作業が完成したら、コタンの方から男はエムシを持ち、婦女は枯よもぎの枝をついて、ホーイ、ホーイと連呼し悪魔払い（口ルンベ）の動作、すなわちエムシを持った手を伸ばしたり、縮めたり、女は杖を持たない方の手を斜めに伸ばし次に胸に戻す動作を繰り返して、着物の裾を高く腰までまくり上げて陰部まで露出して砂の畦に近寄り、足を上げて畦を蹴散らし、古道具やひえを海の中

に蹴こんで、大波に向かって、われわれはこのようにして津波が襲来してコタンのすべての物を海に引き去る代わりに、自分たちの方から先に物を提出する。だからもうコタンまで来る必要はないから、来ないようにと頼みの祈りをする。このまじないの時はほかの神々に願うことなく、津波の心を慰撫する意味で行われる。」

（久保寺逸彦『呪術・巫術』昭和四十四年「アイヌ民族誌」）

地震のときのまじない

「鵠川から平取地方のコタンでは、地震の時は屋外にとび出して、婦女子は穀物を搗く杵（ユタニ）を持って、地面を搗くように叩き、イツケラリー、ホーイ、ホーイと繰り返して呼び、男はエムシ、タシロ、マキリなどを抜身にして地面を刺し、イツケアイウエ、エイタカシユ、アエオマ、すなわちおとなしくしないと腰を突き刺すぞと怒鳴る。この時の呪文はただし個人によって多少異なり、イツケフコツ、イツケフコツ（腰を刺す）という者もあるが、腰を刺すという意味は共通である。」

（久保寺逸彦『呪術・巫術』昭和四十四年「アイヌ民族誌」）

一三 医療

天変地異の自然現象を、アイヌは魔神の仕業と考えたように、身体健康が損なわれて病気になるのも悪神、悪霊が人間に危害を加える―すなわち悪霊が身体に入ることだとした。だから病気を治療するには、体内に入った悪霊や悪鬼を追いはらい、あるいは病魔除けのための方法が行われた。『蝦夷談筆記』によれば「病有」之時は草木の葉を用仕候。尤医師は無之、手配配剤に仕候由。」と記し、野生の植物を薬として使用したとうけとれるが、元来は病魔除けとして用いたものである。アイヌの考えによれば、臭気の強いものや、根に毒のあるもの、とげのはえた木の枝などは病魔も嫌って近寄らないものとされた。例えばエゾヨモギ（ノヤ）は一種特有の臭気があり、これを食用にす

るのは単に口腹の欲を満足するだけのものではなく、体内に摂取することによって病魔を遠ざけ、身心を健康に保ち得るという考えによるもので、ヨモギに除魔力を認め、呪術や治療に広く用いられたのである。

このようなことから、野生の植物は当然病気の治療や予防に使われた。千歳ではイヌエンジュ、ナナカマド、エゾノウワミズサクランボなどの皮を、着物の襟や帽子に縫い込んだり、戸口にたてて病魔除けにしたという。また病気の時の薬としては、腹痛にはイケマの根、ニガキの皮、アオダモの皮、ハコベなどを煎じて飲んだ。下痢止めにはオニシモツやダイコンソウの根、ウバユリの澱粉などが使われた。頭痛にはナギナタコオジユカフツキソウの葉、オオバコの葉、風邪の咳止めにシケレベ（シコロの実）を煎じて飲んだ。

けがをしたときの傷の手当てに、ヨモギ、ムシカリの木、打撲にはエゾテンナンショウの根が使われた。

そのほかお産のあとにはハンノキやエゾマユミの皮を煎じて飲み、クサノオオは痔病や婦人病にも用いられた（『千歳市史』）。

また病気にかった時、さらに悪魔払いの呪術も盛んに行われた。正徳五年（一七一五）の『松前志摩守差出候書付』は「蝦夷人の中で禰宜、かんなぎの類があつて、その効験は非常にすぐれている。すなわち祈祷によって病人は完全になおるし、死者も蘇生する。ただし祈祷すれば必ず効験があるとはかぎらない。祈祷する人はイナオをたくさん立てて祈る。」と記し、病気を直すための加持祈祷の行われたことを示している。

この地方における悪魔払いの呪術について『鵜川町史』によれば

「重い病気になったときは、病人を川に連れて行き、柳の枝にイナウを下げたのを三本立て、川上と川下にチホロカケブを一本づつ立て、川下の神と川上の神に頼み、それからハシナウククルとハシナウマツ（カケスの神？）の夫婦神に「あなた方二人が主になって、どうかこの病人を治して下さい」といって頼み、柳、はんの木、ニワトコの枝を取って来てフッサフッサと振う。」

と述べており、また『千歳市史』は

「気の狂ったときには枝ぶりのよい、春楡の太木のところに行つて木の神にたのみ、にわとこの枝で患者の身体を払い浄め、さらに川瀬に小さな祭壇をつくつて、川の神にたのんで患者の身体をはらつたにわとこの手草を川に流す。」

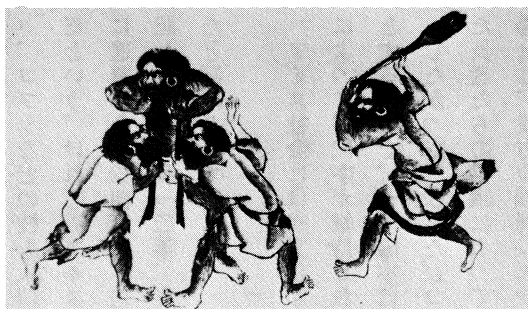
と述べている。

病気で最も恐れられていたのは流行病で、なかでも疱瘡は天地を飛び歩くパコロカムイ（疱瘡神Ⅱ鳥？）の仕業であるとし、部落に流行するような時には、これを退散させるべく種々の呪術が行われた。鶴川では、ニガキ、エンジュ、コブシなどの枝を入口や窓にさし、焚火にもくべていぶすといわれ、千歳ではイヌエンジュの木を門口にさすのだという。けれどもアイヌはこの病魔に対しては全く無力だったことを知るに及んで病者を放棄し、家を捨てて山中に逃避した。『松前志摩守差出候書付』に「疱瘡、はしか、疫病などのさいは、病人に構なく深山深谷へかくれる。」と記し、また寛政一二年、有珠で発生した天然痘が流行したとき、アイヌの男女はみな鍋墨を顔に塗つて山中に避難したと記録されている。

一四 社会規制

アイヌ社会には成文化した法律といったものはなく、祖先より子孫へと継承されてきた一種の社会的慣習Ⅱ仕来りによつて、秩序が維持されてきたらしい。この慣習はウエペケレ（昔話）などに語られる宗教的、道徳的教義を内容とするもので、その根本はカムイ・イレнка（神意）によるものであった。

したがつて、ひとたびコタンあるいはコタン相互の間に、仕来りに対する違反が起ると、コタンの酋長を中心とした長老たちの協議によつて争論の仲裁、刑の宣告および執行が行われた。もし長老たちの一致した判断が得られない場合は、双方の談判（チャランケ）となり、伝承などをひいて弁論し、酋長や長老はこれを聞いて判断を下す。違反



ウカルの図〔蝦夷島奇観〕

者はこの決定に従つて、被害者にアシンベ（償い）を出して謝罪しなければならぬ。このことについて『北海随筆』は「蝦夷の法を犯し不儀有る時は罪の償として宝物を出さしめて相手へ謝す。其罪の軽重によりて宝物の数に増減あり。」と記している。

またこの裁判の方法にウカルというものがあつた、ウカルは、ウ（互いに）カル（打つ）の意味で、チャランケによつて黒白がつかないとき、シユドと称する棍棒で双方なぐり合い、倒れた側が負けとなるらしい。『渡島筆記』に「一人と一人との事は仲だちあれば贖を出し、やまざれば打シユトといふものにてあやまちに服したる方の腰の所を敲、血を見て止む、これをウカルといふ。」とある。ウカルはこのように個人対個人のほかに、部落対部落間の争いもあつた。『千歳市史』に

「鵜川からきて千歳の川上にいた半病人の人が、魚とりをしていたが、川に落ちて溺死体となつて千歳の人の築にかかつたので、千歳の者が殺したのだらうと、鵜川側から抗議を

受けたのでチャランケになつて、シド打ちといつて互に棍棒で打合いをする、黒白をきめる方法が行われたが、鵜川の方が負けて倒れたので、鵜川の負けになつた。これは正しい方にはよい神が味方するから勝つという信仰によるものである。」

と記している。なお、このウカルは変死人や流行病などのあつた場合にも、悪魔払いとして行われていた。

また違反者が罪を白状した場合は問題ないが、そうでない場合は、日本古代にもあつた湯探（ゆさぐさ）などが行われた。『蝦夷奇観』に「婦人等密淫或いは陰惡等の名有るときは、その有無を争論してのち神に誓ひ、熱湯を作り湯中に小石三つ入れて、石を探り取らしむ。陰惡なき者の手依然として腐爛せずとぞ。婦女等はまゝ腐爛して生涯廢人と為る者も

あり。」と記している。

刑罪はアシンベ（賠償）ですむ程度のほかに、多い例としては部落追放で、さらに重いものは髪、髯を剃ったり、皆鼻や耳を削られ、人を殺した者は足の腱を断ち切り、一生不具にさせるといった体刑もあった。しかし死罪はなかった。それは苦痛と侮辱を課することが刑罰にふさわしく、死は刑罰とは考えなかったからといわれる。⁽¹⁰⁾

注 (1) 犬飼哲夫 『北海道の鹿とその興亡』 昭和二十七年 「北方文化研究報告」

(2) 林善茂 『山菜採集』 昭和四十四年 「アイヌ民族誌」

(3) 金田一京助 『アイヌ文化志』 昭和三十六年 「金田一京助選集Ⅱ」

(4) 金田一京助 『アイヌ研究』 昭和十九年

(5) 名取武光 『千歳アイヌの祖印』 昭和四十九年 「アイヌと考古学」

(6) 久保寺逸彦 『生死、冠婚、習俗行事』 昭和四十四年 「アイヌ民族誌」

(7) (6)に同じ 杉浦健一・『沙流アイヌの親族組織』昭和二十七年「民族学研究一六卷三、四号」

(8) (6)に同じ

(9) 久保寺逸彦 『アイヌの死および葬制』 昭和四十四年 「アイヌ民族誌」

(10) ジョン・パチエラー 『アイヌとその説語』 大正十一年

第三章 苦小牧市アイヌ語地名

第一節 アイヌ語地名の意義

苦小牧市には、現在まで確認されたアイヌ語地名はおよそ百余りある。しかしこれらの地名には、アイヌ語の音に漢字をあてて読ませたもの、例えば苦小牧、樽前などのようにすっかり和名化したものが多く、中には糸井、錦岡などのように、その音からはとうていアイヌ語なども想起できないものまで含んでいる。しかしウトナイ、ペンケナイなどのように、その語自体アイヌ語として生き続けている地名が現存しているが、これらは全体からみれば極めて少数で、その大部分はすでに住民によって使用されることなく死滅してしまい、今では古い文献を見なければ知ることができない状態である。

ではこれらの地名はいつごろ、どのようにしてつけられたものなのであろうか。知里真志保によれば

「地名というものは、古い時代からそれぞれの地方で、その住民が生活の必要上からぼつと名づけていったものが、たまりたまって現在にいたったものである。それらの地名の中には、きわめて古いものもあり、また比較的新しいものもある。新しいといっても、われわれの取扱っているアイヌ語地名では、発生してすでに百五十年は経過していると見られるものばかりである。しかもそういう新しいものはむしろきわめてわずかで、大多数のものは何百年何千年の昔から存在していたにちがいないのである。」⁽¹⁾

と述べているように、その起源は何千年前とはいえないまでも、かなり古い時代にさかのぼるらしい。地名がそこに

住む人びとの生活の必要上から名づけたものとすれば、アイヌ語地名の発生は、すなわちアイヌ社会の成立を前提とするものと考えられるから、少なくとも平安時代から鎌倉時代までさかのぼるものと推定される。

日本列島におけるアイヌ語地名の分布は、現在のところ北海道はもとより、北はカラフト、千島列島から、南は東北地方にまで及び、その土地によっては分布に濃淡の差はあるが、古くからアイヌ、あるいはアイ語を持つ人たちが居住していたのである。⁽²⁾

地名というものは前述のように、そこに住む住民が生活の必要上から名づけたもので、たいていはその場所の地形に対して呼んだ名であった。漁や狩で暮らしていた人たちであったから、これらの生業に関連した自然の地形や事物の特徴によって命名した地名が生まれるのであって、農耕文化を基礎とした日本語地名とは非常に異った趣きを有しているのである。したがって、これらのアイヌ語地名を調べてみると、古い時代の住民Ⅱアイヌの暮らし方や考え方がよく表われていることが多い。すなわち

「アイヌ語の地名の中にあられるそういう古い考え方で、何よりもいちじるしく目立つのは、地形事物に対する古代の人びとの考え方である。古代の人びとは、山でも川でも木でも岩でも、すべて自分たちと同じような生き物と考えていた。川を例にとれば、それは生き物であるから肉体をもち、たとえば水源を「ベツキタイ」(川の頭のでっぺん)とよび、川の中流を「ベツ・ラントム」(川の胸のまん中)とよび、川のまがり角を「シットク」(肘)とよび、幾重にも屈曲して流れている所を「カンカン」(腸)あるいは「ヨシベ」(腸)とよび、川口を「オ」(尻)あるいは「陰」とよぶのである。……(中略)……。また、われわれの考え方からすれば、川は山から流れて来て海へはいるものであるが、地名にあらわれた古代人の考え方によれば、それは海から上陸して村のそばを通り村のうしろの山奥へはいっていく生物なのである。アイヌ語の地名にある「オマン・ベツ」(山奥へはいっている川)、「シーマン・ベツ」(ずっと山奥へはいっている川)、「リコマ・ベツ」(高く登って行く川)などは、そういう古い考え方を示している。われわれが川の出発点と考えて、「水源」「みなもと」と名づけているものを、アイヌ語では川の帰着点と考えて「ベテトコ」(川に行く先)あるい

は「ベツ・キタイ」(川の頭のとつべん)と名づけている。またわれわれが川の合流する所を落合と名づけているのに対して、アイヌ語では「ペテウコピ」(川がそこで左右に別れて行く所)と名づけているのも、そういう古い考え方のあらわれである。⁽³⁾

といわれ、アイヌが自然事物のすべてに神の存在を認めるアニミズム(精霊崇拜)の立場にあったことを知ることができるし、また、アイヌの内陸交通の手段として、河川が重要な役割を果たしていたことが理解できる。

このような視点に立つてアイヌ語地名をながめてみると、アイヌ語地名の意味がよく理解できであろうし、またアイヌ語地名は、アイヌ文化の内容を知る上に、貴重な手がかりを与えてくれるのである。

注(1) 知里真志保『斜里郡内アイヌ語地名解』斜里町史 昭和三十年四月

(2) 金田一京助『蝦夷即アイヌの論』民族学研究第十三卷第一号 昭和二十三年七月

山田秀三『東北と北海道のアイヌ語地名考』昭和三十二年六月

(3) 注(1)に同じ

第二節 アイヌ語地名解

一 太平洋沿岸

ペツペツ(別々) 語原は「ペツ・ペツ」(bet-pet 川・川)。すなわち「小川が(ち)ちや(ち)ちやと集まっている所」の意であろう。白老郡との境界をなす川である。

コイボクシペツペツ 語原は「コイボク・クシ・ペツペツ」(koybok-kus-Petpet 西方に・通っている・ペツペツ

川)。別々川の右岸支流。

イクツナイ 語原不明。別々川の左岸支流。『旧五万分

図』⁽¹⁾ 所載の地名。

コイカクシベツベツ 語原は「コイカ・クシ・ベツベ

ツ」(koyka-kus-Petpet 東の方に・通っている・ベツベ

ツ川)。別々川左岸支流。

シンノシケクシベツベツ 語原は「シル・ノシケ・ク

シ・ベツベツ」(sir-noske-kus-Petpet 山の・まんなか

を・通っている・ベツベツ川)。別々川の本流で、その源

は樽前山の裾深く入っている。

たるまえ(樽前) 原名「タオロマイ」。語原は「タ

オル・オマ・イ」(taor-oma-i 高岸・ある・もの)。

この「タオロマイ」が音韻変化によって「タロマイ」に

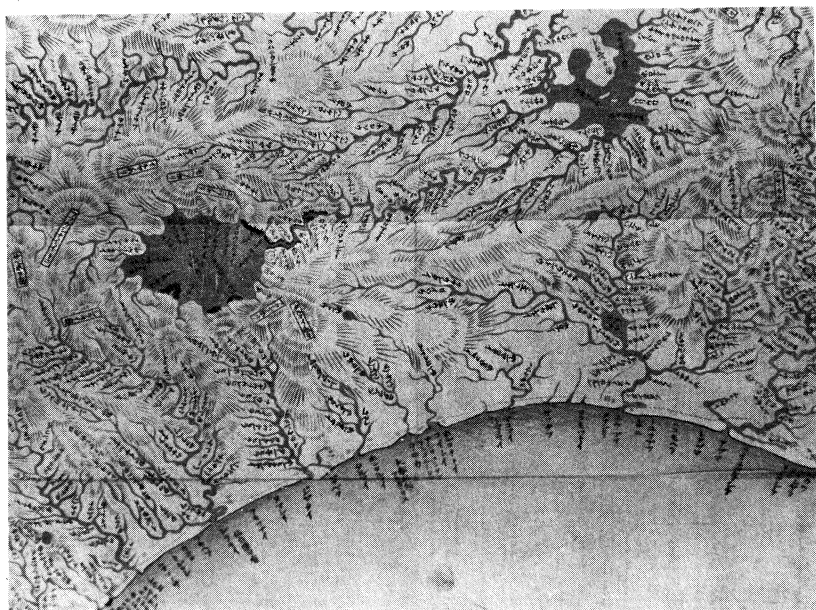
転訛し、後に「樽前」の漢字をあてた。樽前川の地名で

ある。この地は早くからタルマイ場所の置かれたところ

で、近世初頭の文献にも「たるまへ」と記されている。

ポントタルマイ 原名は「ポントオロマイ」。語原は「ポ

ン・タオロマイ」(pon-Taoromai 子の・タロマイ川)。



松浦武四郎「東西蝦夷山川地理取調図」より

『旧五万分図』に「ポントオロマイ」と記されているが、これは「ポン・タオロ・オマ・プ」(pon-Taor-oma-p 子・高岸・ある・もの)で、表現は異なるが「ポントロマイ」と同義語である。樽前川の右岸支流で、樽前小学校の傍を流れる小川。

フシコタルマイ 語原は「フシコ・タオロマイ」(husko-Taoromai もとの・タロマイ川)。樽前川の旧河川を指した地名。

キラウシ 語原は「キラウ・ウシ・イ」(kiraw-us-i シカの角・いつも落ちている・ところ)。樽前山の左岸、『旧五万分図』所載。

フルウ 語原不明。『松浦図』⁽²⁾所載。

ニシタフカル 語原不明。『松浦図』所載。

セセクナイ 語原は「セセク・ナイ」(sesek-nay 熱い・川)。樽前川左岸支流。

コイポクシタオロマイ 語原は「コイポク・クシ・タオロマイ」(koypok-kus-Taoromai 西方に・通っている・タロマイ川)。樽前川の上流にあつて西方より流れ来る支流。

スオプニセイ 語原は「スオプ・ニセイ」(suop-nisey 箱の・絶壁)。樽前川の上流地点と思われるが詳かではない。

エアンニセイ 語原不詳。永田地名解によれば「Ean-nisei エアンニセイ 崩壊タル絶壁」と記し、タルマイ川筋とある。

シノマンタルマイ 語原は「シノ・オマン・タオロマイ」(sino-oman-Taoromai 本主に・山奥へ入っている・タロマイ川)。樽前川の本流の名。

オボツプ (覚生) 語原不明。『松浦日誌』⁽³⁾によれば

「ヲボウ (橋有) 鎗拾う所の義。往古川中より鎗が出たりと言伝う。」

とあり、また『永田地名解』⁽⁴⁾によれば

「Opop オポプ 川尻ニ水湧キ出ル処、此川ハ「タロマイ」川と合流セシ処、噴火ノ時水湧キ上リ破裂シテ別流トナリシト土人云ヒ伝フ。覚生村。」

とある。覚生川の名である。

コイポクシオポプ 語原は「コイポク・クシ・オポプ」(koypok-kus-Opop 西方へ・通っている・オポプ川)。覚生川の右岸支流。

シンノシキクシオポプ 語原は「シル・ノシキ・クシ・オポプ」(sir-noski-kus-Opop 山の・まん中を・通っている・オポプ川)。

ニタツペツ 語原は「ニタツ・ペツ」(ni-tat-pet 谷地・川)。覚生川の支流と思われるが、位置は詳らかでない。『松浦図』所載。

パンケペツ 「パンケ・ペツ」(panke-pet 下の・川)。『松浦図』所載。

ベンケペツ 「ベンケ・ペツ」(penke-pet 上の・川)。『松浦図』所載。

ポンオポプ 語原は「ポン・オポプ」(pon-Opop 子の・オポプ川)。『松浦図』所載。

にしきおか (錦岡) 原名「ニシタツプ (錦多峯)」。語原は「ニシ・タツプ」(nis-tap 雲の・大きな山)とみられるが確かではない。『松浦日誌』は

「ニシタプは昔し此川上に森が有、其に何時も雲が有しと、依て號し也。」

と記し、ジョン・バチエラーは

「ニシタプ 雲を被りたる山。」⁽⁵⁾

とし、さらに『永田地名解』は

「Ni shitap ニシタプ 樹木収縮スル処。」

と説いた。

アシンニシタツプ 語原は「アシル・ニシタプ」(asir-Nistap 新しい・ニシタプ川)。

錦多峯川の新しい河口を指した名。

ポンニシタツプ 「ポン・ニシタプ」(pon-Nistap 子の・ニシタプ川)。錦多峯川右岸支流。

コイボクシニシタツプ 語原は「コイボク・クシ・ニシタプ」(koypok-kus-Nistap 西方に・通っている・ニシタプ川)。

フレベツ 「フレ・ベツ」(hure-pet 赤い・川)。位置不明。『松浦日誌』所載。

いとい (糸井) 原名「コイドイエ」(小糸魚)。語原は「コイ・トイエ・イ」(浪・くずす・ところ)。ここは海岸で土地が低く、時化のために浸蝕され、土地が削られたことに由来したものである。はじめ『小糸魚』の漢字をあてて呼んでいたが、昭和十九年一月、字名改称によって「糸井」とした。小糸魚川の川口付近の地名。

ボンコイトイ 「ボン・コイドイエ」(pon-koytuye 子の・コイトイ川)。小糸魚川の右岸支流。

フシココイトイ 「フシコ・コイドイエ」(husko-koytuye もとの・コイドイエ)。小糸魚川の旧河川名。

口無川 原名は「ポントー」。語原「ボン・ト」(pon-to 小い・沼)。小糸魚川の水源の上手にある沼。

コイカクシナイ 「コイカ・クシ・ナイ」(koyka-kus-nay 東方に・通っている・川)。小糸魚川の左岸支流。

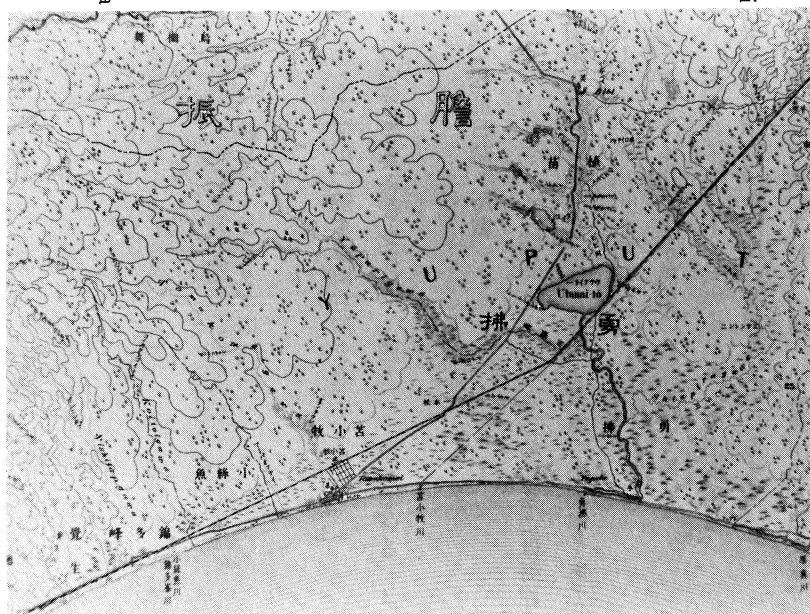
フフシヤシ 語原不明。『廻浦日記』⁽⁶⁾所載。

ルヘノエ 語原は「ル・ヘノイエ・イ」(ru-e-henoye-i) 道・そこで・曲る・ところ)。「トマコマイ」の西に位置していると思われるが詳らかではない。『松浦日誌』所載。

ウスの沢 原名は「マーパオマナイ」。語原は「マ・パ・オマ・ナイ」(na-pa-oma-nay) 澗の・上手に・入っている・川)と思われるが確かではない。別名「ウスの沢」ともいうが、由来は明らかではない。

とまこまい (苦小牧) 原名は「トマコマイ」。語原は「ト・マコマイ」(to-Makomai) 沼の・マコマイ川)で、沼のあるマコマイ川というほどの意である。現在の苦小牧川は、アイヌ語で「マコマイ」と呼び、かつて樽前山神社の西側に帯状の沼があつて、ここから細流が東流して、マコマイ(苦小牧川)に注いでいた。この支流を「トマコマイ」と称したのであつて、これが苦小牧の原名となつた。

ポンアピラ 語原は「ボン・アル・ピラ」(pon-ar-pira) 小さい・片崖)。樽前山神社の南側にあたり、沼に沿って北側にあつた道の片側が崖のようになっていたといわ



二十万分之一地図 (明治27年)[北海道立図書館]

れている。『地番調書』⁽⁸⁾ 所載の名。

まこまい (真小牧) 原名は「マコマイ」もしくは「マコマナイ」であろう。「マコマイ」の語原は「マク・オマ・イ」(mak-oma-i) 山奥に・ずっと入って行く・もの)で「マコマナイ」ならば「マク・オマ・ナイ」mak-oma-nay 山奥に・ずっと入って行く・川)で、同意義である。現在の苦小牧川を指した地名で、かつてはその河口が苦小牧港のすぐ東にあつて海に注いでいた。

ボンマコマナイ 「ボン・マコマナイ」(pon-Makomanay 子の・マコマナイ)。苦小牧川の右岸支流。

コイボクシマコマイ 「コイボク・クシ・マコマイ」(koyok-kus-Makomai 西方へ・通っている・マコマイ)。マコマイ (苦小牧川) の本流である。

チヨロノブンナイ 語原不明。苦小牧川上流の左岸支流。『旧五万分図』所載。

ワツカナイ 「ワツカ・ナイ」(Wakkanay 飲み水・川)。苦小牧川上流の左岸支流。ここは王子製紙工場の上水道の水源地があり、ダムのすぐ傍には湧泉があり、これを「ワツカオイ」(飲み水・そこにある・ところ)と呼んでいる。ここから流れた川が「ワツカナイ」である。

オテーネ 原名は「オテイネウシ」である。語原は「オテイネ・ウシ・イ」(O-teyne-us-i) その川尻が・いつもじめじめ濡れ・つづけている・もの)。苦小牧駅の北側に広がる湿地帯に注ぐ小川の名。川尻がつねに湿地に注ぐことから名づけられたものである。原名の下半が省略されて「オテイネ」となり、さらに「オテーネ」と呼ばれるようになった。

マサラママ 原名は「マサルオマナイ」と思われる。語原は「マサル・オマ・ナイ」(masar-oma-nay 浜の草原・に入っている・川)で、これも原名の下略形が転訛したものである。位置は苦小牧川の左岸支流にあたるが、かつてはホテルトマコマイの付近にあつた湿地帯から南流していた小川があつたと伝えられている。『松浦図』所載。

さたつぷ(佐多布) 語原不明。『松浦日誌』は「サツタフ(小川)乾る義に取」とし、『永田地名解』は

「Satap-Satan-p サタプ 乾キタル処。」

と記している。

サットウ 語原は「サツ・トー」(satto 涸れ・沼)。すなわち夏涸れする沼の意である。位置は『勇払・千歳両郡引継書類』(明治五年)によれば

「サツタフ川ヨリサットウ川マテ、平地十八丁四十毫間四尺、古川幅老間式尺、但板橋官費、水源ハ奥の藪谷ヨリ流来、サットウ海落。」

と記している。

ロコモツナイ 語原は「ロコム・オツ・ナイ」(rokom-ot-nay トゲウオ・ごちやごちやいる・川)。位置不詳。

タナシリ 語原は「タナシ・シリ」(tanasi-ai) 高くなっている・その土地)。位置は勇払市街地の旧恵比須神社のあった南側付近で『地番調書』にも残されている。

ゆうふつ(勇払) 原名は「イプツ」もしくは「イプチ」である。語原は「イ・プツ」ならば「イプツ」(i-pu) それの・その口)、「イプチ」も「イ・プチ」(i-puchi それの・その口)で、いずれも同義語として通用したらしい。この場合、接頭辞の「イ」(i-)、「それ」とは石狩低地帯のシコツル支笏(現在の千歳)を指したものとも思われる。勇払は、江戸時代より「勇払越」における太平洋側の入口として知られるようになったが、しかしそれ以前より古くからアイヌによって利用されていたことは、この「イプツ」の地名によってもうかがうことができる。

江戸時代の中頃より、この「イプツ」の原名はしだいに転訛して「ユウプツ」などと呼ばれ、『勇武津』『優武津』『裕富津』などの漢字をあてて記された。明治三年には「勇払」と記されている。

ルサニ 語原は「ル・エ・サン・イ」(ru-sa-ni) 路・そこから・浜に下る・ところ。勇払川の河口の東側らしく『松浦日誌』に

「ロウサン(平地、玖瑰、沙参多し)路^{ルサン}下る義。昔し此処に会所有し故、シコツ土人此処へ出し故号く。」と記している。

サツトウ 語原は「サツ・トー」(sat-to) 涸れ・沼。

トユウフツ 語原は「ト・イブツ」(to-i-put) 沼の・イブツ、すなわち沼のあるユウフツ川ということであろう。古記によればその位置が勇払川と厚真川のほぼ中間の海岸に記されているが、現在そのような川を見ることはできない。しかし国道二三五号線と日高線との中間に細長く横たわった沼があり、東端は浜弁天部落の付近にあり、西端は断絶しながらも勇払橋と弁天沼を結ぶ道路の傍にあつて、沼の水はわずかに西方に流れて勇払川に注いでいるが、かつては大きな流れとなっていたであろうことは、地形からも想像される。このように、かつては沼より流れた川が西流して勇払川へ注ぐ小川を「トユウフツ」と呼んでいたものと思われる。

ヘコモベツ 語原は「ヘ・コモ・ベツ」(he-kono-pet) 頭を・折り曲げた・川。『松浦日誌』に

「ヘコモベツ(小川)戻川。此川、上の方へ流る、故号く。」

とあるように、川の頭(水源)が浜の方へ折れ曲っている状態を示したものであろう。位置不詳。

トアツマ 語原は「ト・アツマ」(to-Attomam) 沼の・アツマ川。すなわち沼のついているアツマ川というほどの意。厚真川の右岸支流。旧五万分図では一帯の湿地で、かつての沼であり、ここから小流が流れて厚真川に合流していたものと推測できる。同図には東厚真^{トアツマ}などと当字で記してあるのは、東の厚真^{トアツマ}ではなくて、沼厚真であつたことを物語っている。

アツマプト 「アツマ・プド」(Attoman-putu アツマ川の・川口)。厚真川の河口の名。『罕有日記』⁽⁹⁾ 所載。

注(1) 『五万分之一地形図』 明治二十九年版・明治三十五年版・大正十年版。

(2) 松浦武四郎 『東西蝦夷山川地理取調図』 安政五年

(3) 松浦武四郎 『東西蝦夷山川地理取調紀行』

(4) 永田方正 『北海道蝦夷語地名解』 昭和二年十一月

(5) ジョン・パチエラー 『アイヌ地名考』 北海道蝦夷語地名解 附録 昭和二年

(6) 松浦武四郎 『竹四郎廻浦日記』

(7) 扇谷昌康 『苫小牧市のアイヌ語地名』 郷土の研究 第三号別冊 昭和四十六年十二月

扇谷昌康 『トマコマイの語原について』 機関誌苫小牧市史編さん 三号 昭和四十六年八月。

(8) 『勇払郡苫小牧町字地番整理調書』 昭和十九年 苫小牧町

(9) 森春成・高井英一 『罕有日記』 安政四年 市立函館図書館本。

二 美々・勇払川流域

ゆうふつ (勇払) 省略 (前項参照)。

イヌイナエンルン 原名がはっきりしないが、『松浦日誌』などには「イヌイナエンルン」と記されている。これは「イ・ヌイナ・エンルム」(i-nuy-na-enrum それを・隠した・岬)の意となるが、「イ」(イー)とは何を指すかは不明である。同書には次のように記されている。

「イヌイナエンルン (平野) 往昔合戦の有し時、此処に隠れて助りし故事有と。是会所の後ろに当る。」
として、その位置は勇払川右岸と思われる。

アピラプト 語原は「アピラ・プト」(Apira-putu アピラ川の・川口)。アピラは語原を「アル・ピラ・ペツ」(ar-pira-pet 片・崖・川)によるもので、その下略形「アルピラ」が「アピラ(安平)」となったものである。「アピラ」の原地は不明であるが、「アピラプト」は安平川の河口で、勇払川との合流地点である。

シアピラ 「シ・アピラ」(si-Apira 本当の〔本流の〕アピラ川)。安平川の本流。

ニナルカ 語原は「ニナル・カ」(ninar-ka 川沿いの台地・の上)。『旧五万分図』によれば、元静川小学校付近を「ニナルカ」と記しているので、安平川の左岸にある低い台地を指したものである。

エサントンニ 語原は「エ・サン・ドンニ」(e-san-tunni 頭が・浜へ突出している・カシワの木)。ここは安平川の右岸にある柏原の東端の台地。安平川沿いの湿地帯に突き出た岬状の台地に対する地名である。

弁天沼 原名は「ビシウントー」。語原は「ビシ・ウン・トー」(bis-un-to 浜・にある沼)。『罕有日記』の由宇仏管内略図には「ビシエントウ」と記し、安平川の川口付近に描かれており、かつてはかなり大きな沼であったことが推定される。この沼がおそらく『元禄御国絵図』や『三国通覧付図』にみられる浜手の沼であったと思われる、地形の変化によって次第に陸化が進み、現在の弁天沼に変貌していったのではなからうか。

弁天沼の呼称は、勇払に弁財天を祀る詞堂があったことによるものと思われるが、詳細は不明である。

ポロルイカウシ 語原は「ポロ・ルイカ・ウシ・イ」(poro-ruyka-us-i 大きな・橋・いつもかかっている・ところ)。すなわち「勇払越」のルートにあたっていた勇払川に架けられた橋のある地点。『旧五万分図』によれば、勇払よりウトナイに至る旧道が、勇払川に沿った右岸平地を北上し、稔橋より少し上流で勇払川を渡っている。この地点には現在も朽ちた橋脚の残骸がある。「ポロルイカ」はこの付近ではなかったかと推定される。

オタケシ 語原は「オタ・ケシ・イ」(ota-kes-i 砂浜の・しもはずれの・ところ)。『竹四郎廻浦日記』によれば

「会所より陸路を志るさば西手より直に野道にかゝり志はし行て字ヲタケシといへる所を川越東岸へ廻り。」

とあり、『勇払調書』には

「ヲタケシ注(ヲタケシの誤記) 此所平地通行、橋有、東ノ方ニ渡り通りウツナイ……」。

と記されているから、橋の手前、すなわち勇払川の右岸であろうか。

ユウブプト 『松浦図』は「ユウブプト」、竹四郎廻浦日記』は「ユウル」と記し、『勇払調書』は「ユウフリ」と書いていて、原名がはつきりしない。いずれもウトナイ湖より流れるウトナイ(川)と、勇払川との合流地点と指す名である。『旧五万分図』には、二股より上流を「勇振川」としているから、「ユウブプト」は「勇振川の川口」と考えられる。なおこの川は昭和三十一年の地形図には勇払川と記されている。「ユウフリ」の語原は不明である。

ホロナイ(幌内) 語原は「ポロ・ナイ」(poro-nay 大きな・沢)。現在の北大演習林事務所のそばを流れる川で、かつては東流して勇払川に注ぐ右岸支流であった。

ボンポロナイ 「ボン・ポロナイ」(pon-Poronay 子の・ポロナイ)。『旧五万分図』に記載されている地名で、「ポロナイ」の支流であろう。

アツペナイ 語原は「アクペ・ナイ」(akpe-nay わな〔をかける〕・沢)。勇振川の左岸支流。『郷土地名考』⁽²⁾には小山田メノコ説として、「はいなわのある川」と記している。『旧五万分図』所載。

ボンアツペナイ 「ボン・アクペナイ」(pon-Akpenay 子の・アクペナイ)。アツペナイの右岸支流。『旧五万分図』所載。

シユフンナイ 語原は「スプン・ナイ」(supun-nay ウグイ・川)であろうか。『松浦図』所載。位置不明。
シユニウシナイ 語原不明。『松浦図』所載。

ポンユウプ 語原は「ポン・ユウプリ」(pon-Yupuri) 子の・ユウプリ)であろうか。勇振川の右岸支流。

ソアンポンユウプリ 語原は「ソ・アン・ポンユウプリ」(so-an-Ponyupuri) 滝・ある・ポンユウプリ)。「ポンユウプ」より上流にある右岸支流。『松浦日誌』には「勇武滝」と記している。

フブシタイ 語原は「フブ・ウシ・タイ」(hup-us-tay) トドマツ・群生する・林)。勇振川の左岸台地と思われる。

『松浦図』所載。

ヒシユクシユープリ 語原は「ピシ・クシ・ユウプリ」(bi-s-kus-Yupuri) 浜に・通っている・ユウプリ川)。勇振川上流にある丸山遠見山(三二七米)の北側をまわって、ピシユンモラップ山の南に入っている川。

ペニウンポユウプリ 原名は「ペニウンポンユウプリ」で、語原は「ペニ・ウン・ポンユウプリ」(peni-un-Ponpuri) 川上・にある・ポンユウプリ川)。前記のポンユウプリが川下にあるのに対して、川上にあるポンユウプリということなのであろう。丸山小学校前を流れる勇振川左岸支流である。

ふつぶし岳(風不死岳) 原名は「フツプシヌプリ」。語原は「フブ・ウシ・ヌプリ」(hup-us-nupuri) トドマツ・群生する・山)。樽前山の北側に位置し、行政区画上では千歳市に属する。

たるまえ山(樽前山) 原名は「ウファイヌプリ」。語原は「ウファイ・ヌプリ」(焼・山)。享和元年(二八〇一)の『蝦夷道中記』に

「三日、シヤタイ小島居を経てマコマイてふ所にしはしやすらひぬ。前には東洋潮々として無限、後にはオファイノボリ数峯に突出せり。オファイは焼る事。ノボリは山の事。やけやまをいふ事也。」

と記し、古くは「オファイノボリ」すなわち「ウファイヌプリ」と称していた。それが後に場所名のタロマイをとって、「タルマイ山」と呼ぶようになった。もちろんこれは和人によって変えられたものである。

ウトナイ 原名は「ウツナイ」。語原は「ウツ・ナイ」(ut-nay 助骨・川)。ウトナイ湖から流れ出て、勇払川に注ぐ川で、アイヌの考えからいえば、勇払川の脇腹から助骨(あばらばね)のように細長く突出てウトナイ湖に入りこんでいる川なので、このように言ったものである。

ウトナイプ 語原は「ウツナイ・プ」(Utnay-putu ウトナイ・の川口)。勇払川に合流しているウトナイの川口である。

ウトナイ湖 原名は「キムント」あるいは「キムンケト」で、別の名を「ウツナイト」と呼んだ。前者の方が古い呼称と思われるもので江戸時代の末ごろになると「ウツナイト」が一般的に使われたようである。語原は「キム・ウン・ト」(kim-un-to 山・にある・沼)、あるいは「キムケ・ト」(kimke-to 山奥・沼)で、いずれも同義の地名である。

『元禄御国絵図』や『三國通覧付図』によれば、イブツの上流に沼が二つ連なって瓢たん形に描かれている。すなわち山手の方に描かれた沼がこの「キムント」と考えられ、浜手は「ピシウント」(前出の弁天沼)と思われる沼である。

また「ウツナイト」の語原は「ウツナイ・ト」(Utnay-to ウツナイの・沼)で、ウトナイ(川)に付属した沼、という考え方を表わしている。さらに沼の名としては「ウット」(ut-to 助骨・沼)という呼称も文献に残されている。

トキサラ 語原は「ト・キサ」(to-kisar 沼・耳である。「原義 沼耳」。沼の奥が耳のように陸地に入りこんでいる部分。』といわれ、現在、遊園地のある沼の部分了指したものである。

トキサラマプ 語原は「ト・キサ・オマ・プ」(to-kisar-oma-p 沼・耳・にある・者)、「プ」(p)は、それに

流れ込む川を指したもので、西方から流れて「トキサラ」に注ぐ川の名。『旧五万分図』は、この川を「トートンケシオマプ」と記している。これは「ト・トンケシ・オマ・プ」(to-tonkes-oma-p) その沼の・沼尻・にある・者)、すなわち沼尻に流れこむ川のことである。

オタロマプ 語原は「オタ・オル・オマ・プ」(ota-or-oma-p) 砂浜の・中に・入っている・者)。ウトナイ観光ホテルの傍を流れる小川である。

メナシキサラ 語原は「メナシ・キサラ」(memasi-kisar) 東の・耳)。沼の西にあるトキサラに対して東にあるので、こう言ったものである。現在この部分は、かなり陸化が進み、三日月湖のようになって、辛うじて沼の一部と判断される。

トキサラオマプ 「ト・キサラ・オマ・プ」(to-kisar-oma-p) 沼・耳・にある・者)。これは「メナシトキサラ」に注ぐ小川で、現在消滅してしまつたが、『旧五万分図』には小川があり「トキサラマップ」と記されている。

クツタルヘエ 語原不明、ウトナイ湖の東方、千歳線沿いのすぐ東にある地名。『旧五万分図』所載。

ビビプト 語原は「ビビ・プト」(Bibi-putu) 美々川の・川口)。すなわち美々川がウトナイ湖へ流れ落ちる口の意。

フッタトシ 原名は「フタツドシナイ」あるいは「フタツドシ」かと思われる。語原は「フタツ・ウシ・ナイ」(hutat-us-nay) 笹の葉・群生する・沢)、あるいは「フタツ・ウシ・イ」(hutat-us-i) 笹の葉・群生する・ところ)であろう。『松浦日誌』に「フッタトシ(小川)名義、笹多き故号く。」と記している。位置不明。

カオナイ 「カ・オ・ナイ」(ka-o-nay) わな・置く・沢)。『松浦日誌』に「カラナイ(東川)、此処鶴を捕る仕懸を置処なるゆへ号く。」と記している。位置不明。

チライウシナイ 語原は「チライ・ウシ・ナイ」(chiray-us-nay イトウ(魚)・群在する・川)。白鳥湖から流れ美々川に注いでいる小川である。

白鳥湖 原名は「チライウシト」。語原は「チライ・ウシ・ト」(chiray-us-to イトウ(魚)・群生する・沼)。江戸末期から明治にかけての文献には「チライウシト」と書かれ、その後、この沼は丹治一三氏の所有となつて丹治沼ともいわれてきたが、戦後観光ブームに乗つて沼も整備され、しばしば白鳥が飛来し、新設された旅館が白鳥湖温泉といわれたことにより、沼は「白鳥湖」と呼ばれるようになったという。

タブコブ 原名は「タブコブシ」と思われる。語原は「タブコブ・ウシ・イ」(takup-us-i たんこぶ・ついている・所)。「タブコブ」とは「①離れてぼつんと立っている円山、孤山、孤峰 ②尾根の先にたんこぶのように高まっている所。」といわれ、この場合は後者のように、尾根の先に高まつた地形に属している。美々川右岸にあつて、植苗橋のすぐそばまで突出している。

ポンチライウシナイ 「ポン・チライウシナイ」(pon-Chiayusnay 子の・チライウシナイ)。「タブコブ」のすぐ上手にある小川である。『旧五万分図』所載。

パンケエルモツナイ 「パンケ・エルモツナイ」(panke-Erumotnay 下の・エルモツナイ)。「エルモツナイ」は「エルム・オツ・ナイ」(erum-ot-nay ねずみ・ごちゃごちゃいる・沢)の意。美々川左岸支流で、植苗橋のすこし上手にある小川である。

ペンケエルモツナイ 「ペンケ・エルモツナイ」(penke-Erumotnay 上の・エルモツナイ)。パンケ(川下)に対するペンケ(川上)というようになつた地名である。美々川左岸支流で、前者より上手に並んでいる。

うえなえ(植苗) 原名は「ウエンナイ」。語原は「ウエン・ナイ」(wen-nay 悪い・川)。美々川左岸支流。

オハニケウ 語原不明。古記に「ヲハニケウ」「ヲハニケフ」「オハニウコツ」などと記されている。『松浦日誌』に

「ウエンナイ(小川、此処炭焼小屋あり、向にはヲハニケウ(西岸) 人家三軒あり」。

とあるので、位置は旧植苗小中学校の東位の川岸と思われるが確かではない。

パンケナイ 語原は「パンケ・ナイ」(panke-nay) 下の・川^{しも}。美々川右岸支流。タプコブと旧植苗小中学校との中間ほどにある。

ペンケナイ 語原は「ペンケ・ナイ」(penke-nay) 上の・川^{かみ}。美々川右岸支流で「パンケナイ」よりも上手にある川。
フレベツ 語原は「フレ・ペツ」(hare-pet 赤い・川)。湿地を流れるため、水が赤く濁っているので、こう言ったものである。美々川右岸支流。

セタニウシ 原名「セタンニウシ」。語原は「セタル・ニ・ウシ・イ」(setar-ni-us-i エゾノコリンゴの・木・群生している・ところ)。「セタルニ」が音韻変化によつて「セタンニ」となり、さらに「ン」が脱落して「セタニ」となった。美々川の左岸と思われるが、位置は詳かではない。

レウケケニウシ 語原不明。『東蝦夷地各場所様子大概書』⁽⁶⁾に、「れふけ、にうし」と記されて、稼場の一つとなっており、また『勇弘・千年両郡引継書類』⁽⁶⁾には

「ウエンナイ

山道 二十丁廿四間

レウケ、ニウシ

右川幅九尺 但 板橋官費

水源ハ十八丁程東ニアタリ澤口ヨリ流来、ヒ、川合流ユウフツ川ヘ流(中略)。

レウケ、ニウシヨリハンケヒ、川マデ平地三丁三十間壱丈」。

と記されている。

ヒホエカリ 語原は「ピプ・オ・エ・カリ・イ」(Pip-o-e-kari) 美々川の・尻・そこで・まわる・ところ」と思われる。『松浦日誌』に

「ヒポエカリ(小休所、塩くら、炭くらあり)近年は此処より舟積す。傍に丸木船を五、六隻も繋ぎたり。名儀二股の義。ビヴの方と水源の処と此処にて分故号し也」。

とあるように、ここは美々川の本流(パンケビビ川)と支流のペンケビビ川の合流点で、パンケビビ川がここで大きく迂回しながら山へ入っているさまを言ったものであろう。現在の御前水で、ここに舟付場が設けられていた。

パンケビビ 語原「パンケ・ビビ」(panke - Bibi) 川下の・ビビ川。西方に入った支流ペンケビビに対応した地名である。本流をなぜ「パンケビビ」(川下のビビ川)と称したのか理由は不明である。

シヒンコ 語原不明。パンケビビ川左岸にある。『松浦図』所載。

フブシビビ 語原「フブ・ウシ・ビビ」(hup - us - Bibi) トドムツ・群生する・ビビ川。パンケビビ川右岸。

オホコツ 語原「オホ・コツ」(oho - kot) 深い・谷。パンケビビ川の左岸らしく、ここは深い湿地の沢となっており、苦小牧低地帯の末端は、ここで終りを告げる。沢の西方台地に美々貝塚がある。行政区画上は千歳市に属する。

シノマンビビ 語原は「シノ・オマン・ジビ」(sino - oman - Bibi) 本当に・山奥へ入っている・ビビ川。すなわちパンケビビ川の本流。

ペンケビビ 「ペンケ・ビビ」(penke - Bibi) 川上の・ビビ川。御前水付近から西方に入っている川の名。

ビビ(美々) 語原については諸説があつて確定していない。『永田地名解』は「Bibi ビビ 川川「ペツペツ」ノ訛ナリ」と記している。また位置について、『松浦日誌』は

「……追分(右ビッ左ビボエカリ)標を立たり。右に下ればビベンコ(またペンケビとも云、名義、冷水の上に湧出る儀、此処に四尋も深き水の壺あり(番やあり、チトセ荷物此処より小舟に積なり)。傍崖にて風景よろし。丙午の秋は余是より船にて下る(此船路五リ)」。

とあり、ペンケビ川の上流にあつた舟付場のあつたところを「ビベンコ」と記している。「ビベンコ」は「ビビ・エムコ」(Bibi-emo 美々川の・水源)の意である。古記録によれば、この地を「ビビ」と記しているものが多いが果してここが美々の原地かどうかは不詳である。

ルオサン 語原は「ル・オ・サン・イ」(ru-o-san-i 道・そこで・下る・ところ)。ここはビビの舟付場へ下つてゆく坂道の地名である。場所は詳かではない。

注(1) 『勇弘・沙流・白糠・静内諸調』明治三十四年 北海道行政資料課蔵本。

(2) 『苫小牧町史資料23』市立苫小牧図書館蔵。

(3)(4) 知里真志保 『地名アイヌ語小辞典』昭和三十一年九月。

(5) 『新北海道史』第七巻、資料一。

(6) 北海道行政資料課蔵本。